

帶曲輪5（図15）

〔概要・特徴〕 曲輪3平坦部の下部に設けられた曲輪の一部と想定。南側は削平により失われた可能性が高い。付帯施設はSD03。〔平坦部規模〕 長6.7m以上×幅2.3m以上。〔平坦部面積〕 13m²以上。

3. 堀 跡

2条確認。双方とも西高東低に傾斜。底面には、高さ2～3mの段差を伴う平坦面（標高134.5mおよび137.5m）が設けられる。このうち、低い方の平坦面は、国道454号線下を水平ないし若干傾斜しながら五戸川方向へと延びる模様である。これら2つの堀底の傾斜角、および周辺にみられる平坦気味の地形、更に5章で示す旧地籍図の状況を総合すると、国道454号線に沿って南北に延びる何らかの曲輪が存在するとみられ、それが2本の堀により3分割以上に細分されていた可能性も指摘得る。

なお、これら2つの堀は、国道に面した部分がV字状の凹みとして残っており、高台の民家と下の国道とを結ぶ私道などに使われていることを調査前に把握していた。堀の痕跡と捉えたものの、代々暮らしている地元住民からは「昭和頃まで使っていた道路の跡」という証言しか得られなかった。半信半疑のまま、各凹みの下に位置する国道際から調査を開始したところ、大規模な搅乱層の下から堀の東端が現れたため、斜面を下る堀になると確信した。後に、斜面上位～中位を調査したところ、2つとも同じような高さに階段状の平坦面を持ち、舌状台地を東西に横切るであろう大規模な堀と判明した経緯がある。

堀跡1（図15・16）

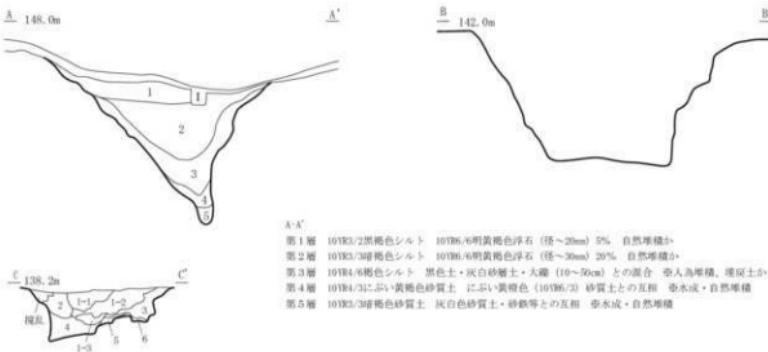
〔概要・特徴〕 曲輪1と2、帶曲輪1と2・3とを南北に分断する堀。東側と西側は調査区外へと延びる。形状によりa～d地点に区分されるが、b地点以下は、電柱・擁壁などの構造物や土地改変により不鮮明。堀の全体形状は、西高東低、東の五戸川に向かって傾斜・開口する。a地点は、横断面V字状で底面が傾斜。b～d地点は、横断面U字状で各底面は水平気味、全体的には階段状を呈し、垂直の段差と平坦面の組み合わせにより、高低差が著しく変化する。なお、底面上には、流水や雨水等によると思われる不規則な起伏や凹凸が目立つ。各地点の特徴等は、次の通り。〔a地点〕 III S-85周辺に位置。上端幅12m、下端幅0.7m。調査前まで埋没せずV字状に窪んでおり、底部付近は昭和のある時期まで通路として利用された後、下水管埋設により搅乱を受けている（5章3節3項①）。底面は西高東低、標高140～144m。〔b地点〕 III T-87周辺に位置。上端幅9.5m、下端幅7.5m、長さ6mと推定。底面標高137.5m。〔c地点〕 III T-88周辺に位置。上端幅4.5m以上、下端幅3mと推定。底面標高134.5m。〔d地点〕 III U-88周辺に位置。上端幅4.2mもしくは8.6m以上、下端幅2mと推定。底面標高133.5m。壁面の傾斜角は45°程度。〔壁面の掘り込み〕 b地点北側、帶曲輪1下方の壁面に不整形の掘り込みが5ヶ所ほど不規則に点在（写真14）。規模は40～160cm前後、底面はいずれも水平気味である。これらは人為堆積土（下記堆積土2）により直に覆われているため、堀の埋め戻し以前まで機能・存在していた模様である。用途・機能は不明。各々不整形ながら底面が水平気味であるため、何らかの足場、特に埋め戻し等に関わる一時的な足場とも考えられる。

〔堆積土〕 概ね3分される。堆積土1：底面を直に覆う自然堆積土。周辺の基本土層を起源とする砂

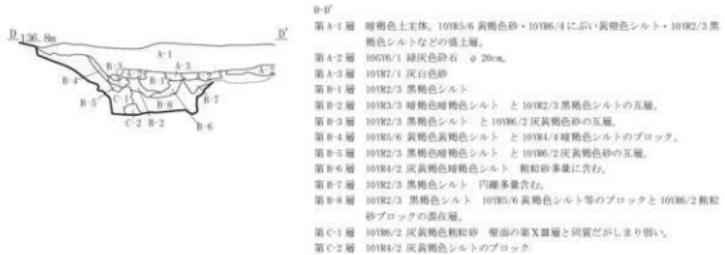
堀跡 1 断面



堀跡 2 断面



C-C'	
1-1層	10YR4/1褐色灰色砂 - 10YR2/1黒褐色シルト(φ～40mm) - 10YR5/6黄褐色シルト(φ～60mm) - 10YR5/6黄褐色浮石(φ～15mm) - 10YR5/1褐色灰山灰(φ～40mm) - 10YR7/1褐色灰火山灰(φ～40mm)との混合。
層下部に	10YR5/6黄褐色浮石(φ～15mm) 層底に埋積。
1-2層	10YR4/4褐色シルト - 10YR3/3褐色色シルト - 10YR6/6黄褐色浮石 + 10YR2/1黒色シルトとの混合。10YR5/6黄褐色浮石(φ～30mm) 5%。
1-3層	10YR6/1褐色灰色砂 右下は 10YR3/1褐色灰色砂と互層。4層との層理面は 10YR5/6黄褐色小礫(φ～10mm) 在層中に埋積(厚20mm)。
2層	10YR7/1灰白色砂 上平(2層)～10mmの小礫を5%含む。4層との層理面にφ～20mmの小礫が埋積(厚20～60mm)。
3層	10YR6/1灰白色砂 - 10YR4/4褐色浮石(φ～40mm) - 10YR2/1黒色シルトとの混合。
4層	10YR6/1褐色灰砂 層下部に 10YR4/3にぶい黄褐色シルトが薄く堆積(厚10mm)。
5層	10YR6/1灰白色砂 層下部に 10YR4/3にぶい黄褐色シルトが薄く堆積(厚10mm)。
6層	10YR6/1褐色灰砂 φ～10mmの小礫を含む。4層と混訛。



0 1:200 5m

図16 堀跡(2)

礫・砂鉄・浮石などの互層。堆積土2：堆積土1の直上を覆う非常に厚い人為堆積土。a地点に集中。各基本土層がブロック状に化したものの混在または集合体であり、概ね遺構付近の壁面に露出する基本土層と一致。各ブロックは、大きな塊だと数十cm以上となり、所々直線的に角張る特徴を示すことから、掘削に金属器を用いた可能性が高い。その量はa地点段差付近の堀底から4.5m、帶曲輪平坦面と同等の高さにまで達するが、a地点より上は底面が削平を受けているため不明、b地点より下は周辺の土質にあわせ灰白色土（第XIII層）の量比が多くなる。堆積土3：堆積土2の上部を覆う自然堆積の黒色土。近世以降、特に近・現代の遺物を含む。以上の性格について、堆積土1は堀が開析・機能していた段階における初期自然堆積土。同じく堆積土2は、a地点周辺の埋め戻しに関わる短期間に形成された人為堆積土。城館廃絶に関わる重要な痕跡となり得る。同じく堆積土3は、城館廃絶後、江戸時代以降を中心とする自然堆積土と推定する。

堀跡2（図15・16）

〔概要・特徴〕 曲輪2と3、帶曲輪2・4と5とを南北に分断する堀。東側と西側は調査区外へと延びる。形状・特徴は堀跡1に酷似。e～gに3区分されるが、f地点以下は擁壁などの構造物や土地改変により不鮮明。各地点の特徴は、次の通り（堀跡1に類する説明は省略）。〔e地点〕 III J -86周辺に位置。横断面V字形。上端幅12m。下端幅0.7m。底面は西高東低、標高140～141m。壁面の傾斜角は、北側（曲輪2側）80°、南側（曲輪3側）50°。〔f地点〕 III J -88周辺に位置。これ以下の地点は横断面U字形。上端幅9.5m。下端幅6m。底面標高137.5m、面積55m²以上。壁面の傾斜角は、南北とも60～70°程度。〔g地点〕 III H -93周辺に位置。上端幅7.4m以上。下端幅3.6m。底面標高134m以下。〔堆積土〕 堀跡1と同様。f地点に明確な人為堆積土（堀跡1堆積土2相当）が集中堆積し、帶曲輪4・5との段差・高低差を埋める目的が強かったと推定。他の地点は自然堆積土主体。最後まで埋まり切らなかった部分は、台地上の民地と下の国道とを結ぶ通路になった模様である。

4. 溝 跡 (SD)

3条確認。SD01が帶曲輪1、SD02が帶曲輪4、SD03が帶曲輪5に伴う。平面形状は、いずれも各帶曲輪の基部に沿って直線状に延伸。内部は壁面と底面の凹凸が著しい。全長は削平・擾乱によりいずれも不明だが、平均幅はSD01が50cm、SD02が120cm、SD03が130cm程度、同じく深さはSD01が50cm、SD02が30cm、SD03が25cm。SD01は幅が細く深いのに対し、SD02と03は幅が広く浅い傾向にある。SD01は、上位の曲輪1から壁面を垂下する溝が2ヶ所接続・分岐（写真18右上）。SD02は、南端が堀跡2の底へ向かって壁面を垂下（写真18左下）。SD03も、西北端が堀跡2へ垂下する痕跡がわずかに残る。堆積土は、いずれも下部の初期堆積土に細砂や砂鉄を主体とする薄い縞状の互層を形成、流水の影響を受けている。SD02・03は上部も同様。但し、SD01の上部は人為堆積土となっており、堀跡1と同時に埋め立てられた模様である（堀跡1の堆積土2を参照）。用途機能については、初期堆積土の特徴、凹凸著しい底面形状、曲輪や堀底へ上下に延びる形状より、城館の上方から下方へ流れる水を管理する導水施設、下水ないし排水溝と考えられる。

5. 竪穴遺構 (ST)

A区2棟、F区1棟、計3棟確認。A区2棟はともにA区曲輪Iの東端縁辺部に位置。但し、明らかに中世といえるのは、AST01のみである。AST02は当初中世と捉えたが、調査中から近代以降の要素が強く現れ、時期判定に迷う。

A区第1号竪穴遺構 [AST01] (図17)

【形状】平面形は不整長方形。長軸中程より南は東西の幅が広がる。長軸は南北方向 (N-11°-W)。規模は6.2×3.2m程度。深さは60~70cm程度。【内部施設】床面：第VII層。土質が軟質なせいか、床面の硬化は部分的・限定的。柱穴：22基。平面形は円ないし隅丸方形。上端規模18~45cm、下端規模9~33cm、床面からの深さは8~71cm。底面は第VII~VIII層。柱穴は建物壁際を主に、建物南側は中程にも並ぶ (Pit20~22)。出入口：建物南側に若干突出 (Pit8・22以南)。底面は傾斜、部分的に硬化。【堆積土】黒色土主体。自然堆積主体。【出土遺物】覆土1層中より聖宋元寶1枚が出土。

A区第2号竪穴遺構 [AST02] (図17)

【形状】平面形は不整長方形。西から東に向かい扇状気味に広がる。長軸は南北方向 (N-12°-W)。規模は4.2×2.3m程度。深さ：20~30cm程度。【内部施設】床面：第VII層。硬化は特に無し。柱穴：19基存在。平面形は円ないし隅丸方形。上端規模19~45cm、下端規模10~36cm、床面からの深さは7~60cm。底面は第VII~VIII層。柱穴は建物壁際、中央付近 (Pit9)、建物南側は内部側にも列を成す (Pit13~17)。【堆積土】黒色土・自然堆積主体。【出土遺物】床面に焼物片 (煉瓦か) が散在、堆積土上部より近代遺物等が出土。【時期】遺構形状やAST01との位置関係を重視すれば中世の可能性もある。但し、AST01とは形状・雰囲気・深さなどが異なる。出土遺物や遺構周囲に近・現代の搅乱が著しい点を重視すれば、本遺構は近代以降に形成された可能性もある。本地点付近に家畜小屋があったという話も聞いている。AST01との位置関係や長軸方向が整合的なのは、構築場所が台地縁辺部という地形的条件による可能性も考えられる。(佐藤)

F区第1号竪穴遺構 [FST01] (図18)

【検出状況】F区の第一次・第二次精査範囲の両方にまたがっている。第一次の遺構精査時には土層の確認を優先したため、土層断面で本遺構が存在することを確認した。平安時代の竪穴建物跡の覆土上位に第VII層を起源とする黄褐色浮石を含む暗褐色土の床面が形成されている。【平面形】平面形を明確にとらえることはできなかったが、床面と周囲の土層断面、柱穴の配置から長方形の竪穴遺構としてとらえた。推定規模は長軸4.47m×短軸2.50mである。【内部施設】柱穴が6基検出された。上端径48~26cm、深さ30cm~70cmほどである。【堆積土】黒褐色のしまりのない土層が主体である。【出土遺物】なし。【時期】形態や掘り込み面から中世ないしそれ以降のものである可能性が高い。(中村)

6. 柱穴群 (SP)

250基を確認した。平面形状は、円~隅丸方形基調。本節冒頭のとおり、中世と明言し得る遺構は

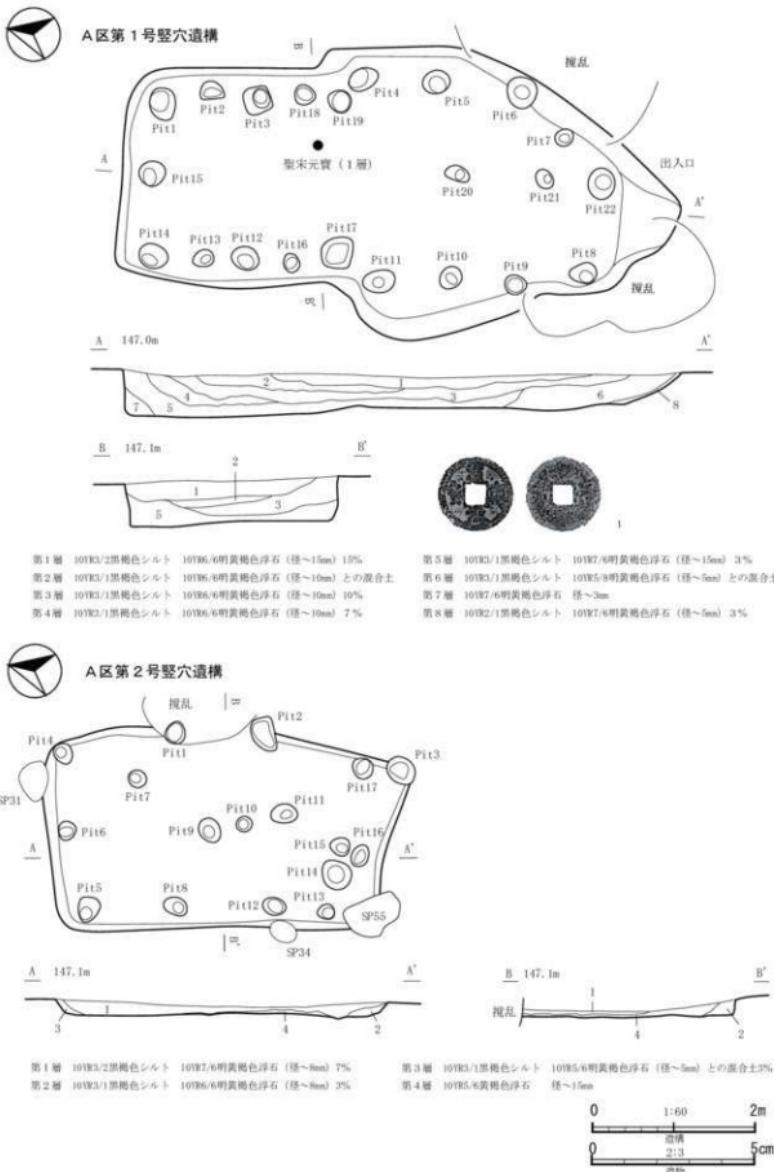


図17 竪穴遺構(1)

皆無である。特に曲輪1・2に位置するものは、施設復元を目指して相当留意して調査・検討したにも関わらず、同じ調査区内に多数存在する柱穴状の搅乱（近・現代につき報告除外）との区別が付きにくかった^{※1}。両者の違いは、近・現代の遺物を伴うか否かの差に過ぎず、よって今回報告する分に近・現代の搅乱が含まれている可能性も否定できない。

※1 遺構確認面は、報告する柱穴も搅乱と同じ表土直下であり、遺構規模や覆土も類似する。ともに壁面が崩落し易い軟弱な浮石層を中心に構築されているため、遺構形状や空隙による判別も困難であった。

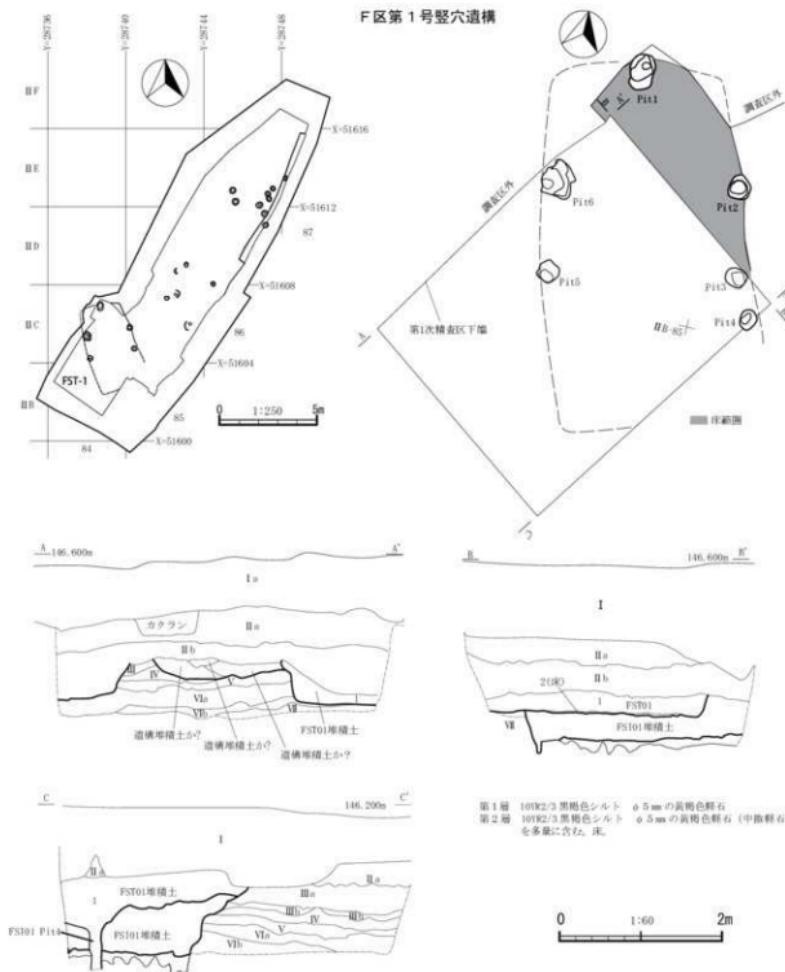
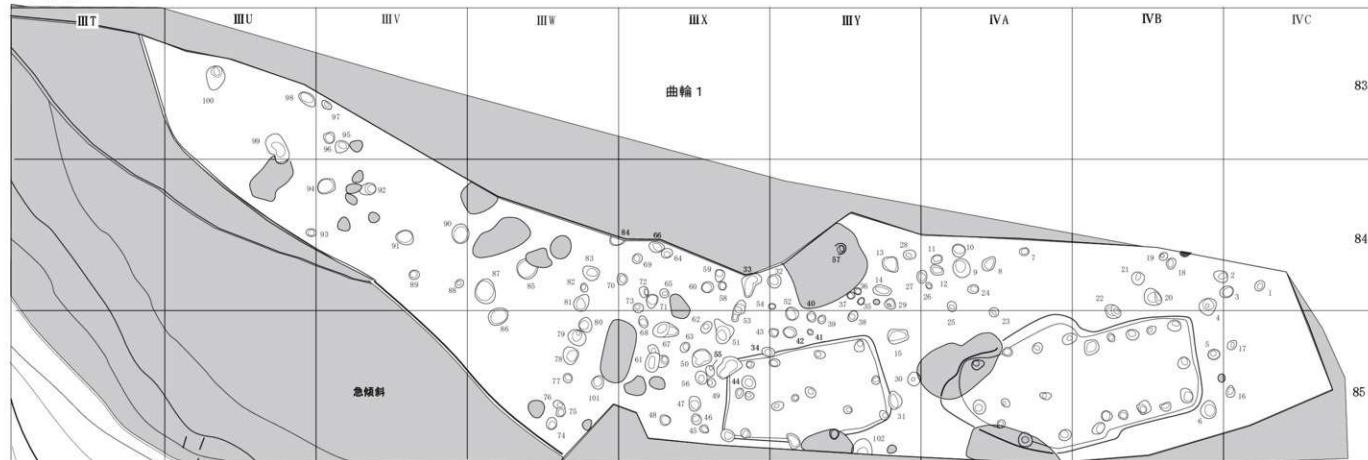


図18 竪穴遺構 (2)



B区柱穴群 (1:100)

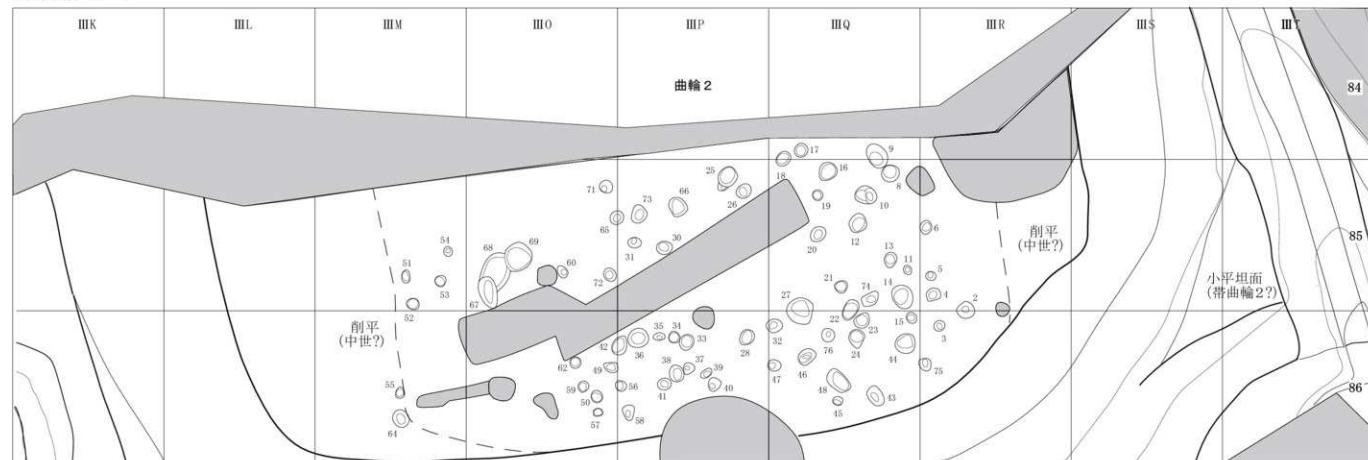


図19 柱穴群（1）

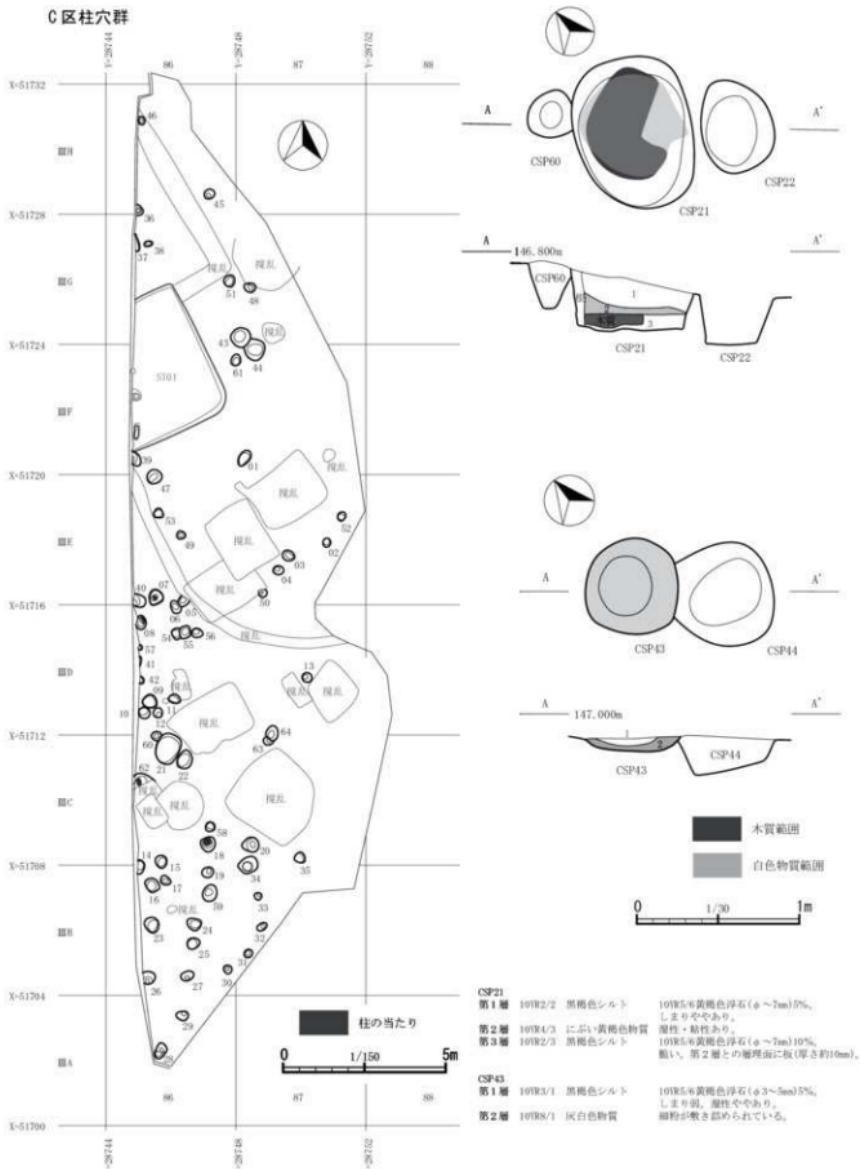


図20 柱穴群 (2)

A区柱穴群(図19)

[数量] 100基。[上端規模] 14~79cm。[下端規模] 5~56cm。[深さ] 確認面より 8~71cm。[底面] 第VII~VIII層。

B区柱穴群(図19)

[数量] 70基。[上端規模] 21~87cm。[下端規模] 9~68cm。[深さ] 確認面より 5~60cm。[底面] 第VII~VIII層。(佐藤)

C区柱穴群(図20)

[数量] 64基。[上端規模] 17~96cm。[下端規模] 6~82cm。[深さ] 確認面より 8~80cm。[底面] 第VII~VIII層。[特記事項] SP21・SP43は白色物質の堆積が確認された。白色物質は、にぶい黄褐色~灰白色の色調をした細粉で、柱穴の中位から下位に10~14cmの厚さで堆積していた。骨粉もしくは灰の可能性もあるが自然科学分析をしていないため判然としない。(平山)

F区柱穴群

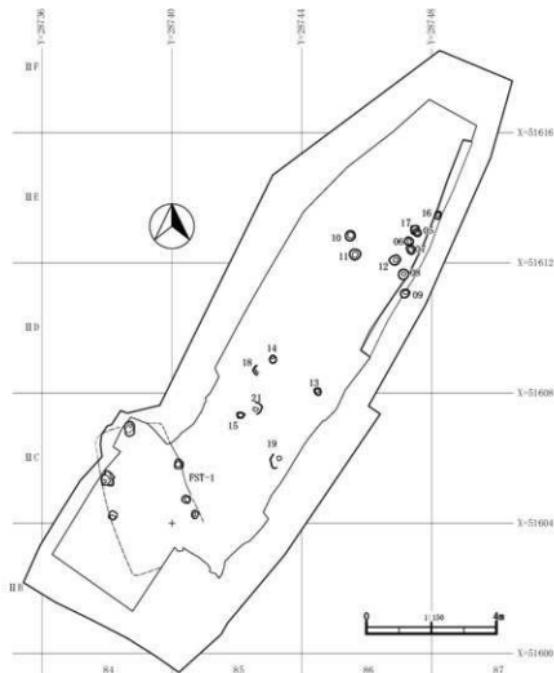


図21 柱穴群(3)

F区柱穴群（図21）

平安時代の堅穴建物跡覆土を掘り込んでおり、中世ないしはそれ以降の可能性が高い。平安時代の堅穴建物跡付近に集中するのは、土層が異なるため認識しやすかった可能性もある。掘立柱建物跡を構成する可能性があるが、復元できたものはない〔数量〕16基。〔上端規模〕25cm～42cm。〔下端規模〕13～21cm〔深さ〕9～92cm。〔底面〕第VII層。
(中村)

7. 中近世の出土遺物（図22）

中世の遺物は、銭貨が3点出土している。図22-1は熙寧元寶（北宋：初鑄1068年）・図17-1は聖宋元寶（北宋：初鑄1101年）・図22-2は無文錢（模鋳錢：中世末期～近世初頭）である。聖宋元寶はA区第1号堅穴遺構の堆積土から、その他はC区第I層から出土した。

近世遺物は、寛永通寶がB区とC区の第I層から各1点出土している。前者（図22-3）は寛永通寶1期（古寛永：初鑄1636年）・後者（図22-4）は同3期（新寛永：初鑄1697年）である。また、陶器の袋物（写真23-写1）は越後産焼耐熱利の可能性もある。
(平山)

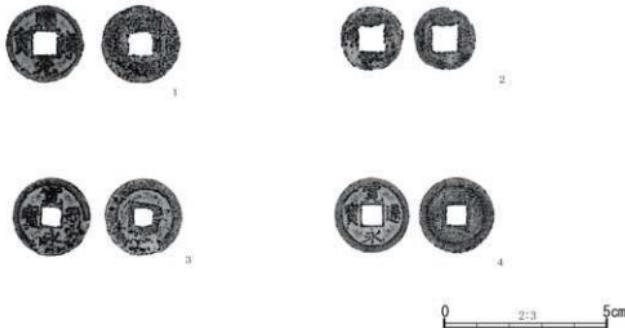


図22 中世・近世の遺構外出土遺物

縄文時代の遺構・遺物観察表

土坑(縄文時代)

図番	遺構名	主位置	確認面	底面	上端(cm)		下端(cm)		深さ(cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
5	FSK02	II E-86+87	VII	VII	(170)	(91)	(133)	(36)	(136)	FSK02・FSK03は重複しFSK02が新らしい。
5	FSK03	II E-87	VII	VII	(98)	(68)	(52)	(24)	(83)	FSK02・FSK03は重複しFSK02が新らしい。

縄文土器(早期)

図番	写真	出土地点	出土層位 取上番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	特徴等		
								外	内	底
5-1	23	II (K)遺塚	表塚	深鉢	—	—	2.8	外面：貝殻模様文→連續刻突。内面：ヨコナガル貝殻条痕。その他：補修孔		

縄文土器(中期・後期)

図番	写真	出土地点	出土層位 取上番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	特徴等		
								外	内	底
5-2		II E-86+87	V1	—	—	—	—	外面：XL付加縫(L) 縦位回転。内面：縦位のミガキ		
5-3		II E-86+88	V1	—	—	—	—	外面：XL付加縫(L) 縦位回転。内面：縦位のミガキ		
5-4	23	B C-86	V1	—	—	—	—	外面：相 縦位回転。内面：縦位のミガキ		
5-5		FSM01	2	—	—	—	—	外面：XL斜位回転。内面：縦位のミガキ		
5-6		FSM01	得土	—	—	—	—	外面：LR横位回転。内面：横位のミガキ		

石器

図番	写真	出土地点	出土層位 取上番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考		
										外	内	底
5-7	23	FSM01	S-X	—	14.8	5.0	4.0	696.2	安山岩			

平安時代の遺構・遺物観察表

堅穴建物跡

図番	遺構名	主位置	確認面	底面	上端(cm)		下端(cm)		深さ(cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
6+7	CS101	III F-G-86	VII	VII	428	(339)	399	(329)	37	カマドは南寄附に設置。
9+10	FSI01	II B～II D-81～96	VII	VII	600	(518)	583	(495)	671	カマドは北東側間に設置。
9+10	FSI02	—	—	—	—	—	—	—	—	FSI01と同一遺構。
10+11	FSI03	II B+II E-86+97	VII	VII	421	(279)	397	(263)	480	カマド不明。北東側か。

CS101 杖六

図版	柱穴名	確認面	底面	上端(cm)		下端(cm)		深さ(cm)	備考
				長軸	短軸	長軸	短軸		
7	1	VII	VII	39	32	14	11	30	

FS103 杖六

図版	柱穴名	確認面	底面	上端(cm)		下端(cm)		深さ(cm)	備考
				長軸	短軸	長軸	短軸		
11	1	VII	VII	(48)	(39)	(35)	(26)	16	
11	2	VII	VII	35	35	19	17	51	
11	3	VII	VII	33	31	17	16	54	

土坑

図番	遺構名	主位置	確認面	底面	上端(cm)		下端(cm)		深さ(cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
13	FSK01	II E-94	III a	V	(85)	(55)	(43)	(23)	(46)	確認面上位で上断面出土上、刀子出土。

土器類・漁獵器

図番	写真	出土地点	出土層位 取上番号	種別	器形	部位	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	特徴等		
										外	内	底
7-1		CS101	I 前 P-3	土器	縦	甌	—	—	6.6	外面：口縁ヨコナガリ→ケズリ。内面：ヨコナガ		
7-2		CS101	P-8	土器	縦	甌	—	—	—	外面：ケズリ→白色粘土付着。内面：ヨコナガ		
7-3		CS101	I 前	土器	縦	甌	—	—	3.2	内・外面：ロクロナゲ		
7-4		CS101	I 前	土器	縦	甌	—	—	6.4	1.1. 内・外面：ロクロナゲ。底部：河原石介切痕		
7-5		CS101	I 前	土器	縦	甌	—	—	6.2	1.0. 外面：ケズリ→ミガキ。内面：ナゲ。外底面：ケズリ？		
10-1		FSI01	カマド埋造	土器	甌	甌	—	—	—	外面：ケズリ。内面：ヘラブナ→ヨコナガ		
10-2		FSI01	カマド埋造	土器	甌	甌	—	—	—	外面：ケズリ。内面：ヘラブナ→ヨコナガ		
10-3		FSI01	カマド埋造	土器	甌	甌	—	—	7.5	外面：ケズリ。外底面：ヘラブナ。内面：ナゲ		
11-4		FSI01	カマド	土器	甌	甌	—	—	—	外面：ケズリ。内面：ヨコナガ		
11-5		FSI01	カマド埋造	土器	甌	甌	—	—	—	外面：タタキ。内面：ヨコナガ		
14-1		堅続2	甌	土器	甌	甌	—	—	6.2	1.8. 外面：ケズリ。内面：ヨコナガ。外底面：木製瓶→ケズリ		

鉄製品(平安時代)

図番	写真	出土地点	出土層位 取上番号	種別	部位	法量(cm)		備考
						底面	周面	
11-6		FSI01 鹿土 鉄製品	鐵鍊車	円盤部	長さ	10.8cm × 4cm		
11-7	23	FSI01 鹿土	鉄製品	車輪部	径	5.5cm × 厚 3.1cm	軸部長 2.5cm × φ 4cm	
13-1		FSK01	鹿土	刀子	残存	18.7cm × [底部 1.8cm]		

中世以降の遺構・遺物観察表

遺跡

図番	遺構名	主位置	確認面	底面	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
15	壁跡1	図T-96他	I~II	XIII	3300以上	1200以上	3300以上	1200以上	79	600以上 台地頂部東端が埋まり切らず保険化。
15	壁跡2	図J-98他	I~II	XIII	3200以上	1200以上	3200以上	1200以上	79	600以上 台地頂部東端が埋まり切らず保険化。

遺跡 (S0)

図番	遺構名	主位置	確認面	底面	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
15	S001	図U-96他	X面	XIII	1240	53	1240	20	90	荷造輪1の基部に付跡。荷輪1.5m×2.5mを推定。
15	S002	図K-98他	X面	XIII	670	120	670	100	30	荷造輪4の基部に付跡。荷輪4.5m×2.5mを推定。
15	S003	図I-98他	X面	XIII	830	130	830	79	25	荷造輪5の基部に付跡。北西端小堅納2へ垂下。

堅穴遺構 (ST)

図番	遺構名	調査区	主位置	確認面	底面	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
17	AST01	A	IV A-95	V面	VII	662	361	629	332	66	埋穴穴主体。南側に出入口。堅穴元寶1（埋土1層）。
17	AST02	A	III Y-95	V面	VII	446	250	424	232	22	土面周辺に削・現代遺物（練瓦片？）。
18	FST01	F	II C-94	V面	VII	-	-	447	250	84	

堅穴遺構内柱穴

図番	遺構名	柱穴名	区	確認面	底面	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
17	ST01	SP01	A	V面	VII	41	23	26	24	96	
		SP02	A	V面	VII	30	24	22	11	18	
		SP03	A	V面	VII	39	39	17	16	44	
		SP04	A	V面	VII	38	26	28	20	53	
		SP05	A	V面	VII	34	29	22	19	19	
		SP06	A	V面	VII	29	37	19	17	61	
		SP07	A	V面	VII	24	20	13	11	20	
		SP08	A	V面	VII	34	26	17	14	58	
		SP09	A	V面	VII	27	24	20	17	36	
		SP10	A	V面	VII	30	25	16	11	31	
		SP11	A	V面	VII	49	27	14	13	52	
		SP12	A	V面	VII	35	28	21	17	63	
		SP13	A	V面	VII	26	21	14	9	18	
		SP14	A	V面	VII	36	29	20	12	71	
		SP15	A	V面	VII	33	31	22	15	45	
		SP16	A	V面	VII	24	20	16	12	8	
		SP17	A	V面	VII	45	41	33	25	67	
		SP18	A	V面	VII	26	24	20	15	29	
		SP19	A	V面	VII	29	25	25	21	58	
		SP20	A	V面	VII	31	18	14	11	31	
17	ST02	SP21	A	VII	VII	26	20	11	9	46	
		SP22	A	VII	VII	39	33	29	19	41	
		SP23	A	VII	VII	28	27	23	18	29	
		SP24	A	VII	VII	45	31	36	22	29	
		SP25	A	VII	VII	39	31	23	19	41	
		SP26	A	VII	VII	27	22	13	13	46	
		SP27	A	VII	VII	32	27	16	15	60	
		SP28	A	VII	VII	24	21	18	12	60	
		SP29	A	VII	VII	30	21	14	13	41	
		SP30	A	VII	VII	32	25	16	13	17	
		SP10	A	VII	VII	20	19	13	12	9	
		SP11	A	VII	VII	33	24	15	10	47	
		SP12	A	VII	VII	29	22	20	15	47	
		SP13	A	VII	VII	21	19	15	13	26	
		SP14	A	VII	VII	39	35	22	20	19	
		SP15	A	VII	VII	24	22	14	11	22	
		SP16	A	VII	VII	28	21	19	11	19	
		SP17	A	VII	VII	27	25	20	14	29	

堅穴遺構内柱穴

図番	遺構名	柱穴名	区	確認面	底面	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
18	FST01	SP01	F	V面	VII	45	31	10	9	70	
		SP02	F	V面	VII	31	29	19	16	82	
		SP03	F	V面	VII	25	22	20	16	53	

柱穴 (A区)

図番	遺構名	柱穴名	区	確認面	底面	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
19	AS01	ASP01	IV C-94	V面	VII	29	14	16	13	12	
		ASP02	IV B-94	V面	VII	26	20	25	18	11	30
		ASP03	IV B-94	V面	VII	31	23	16	19	16	
		ASP04	IV B-94	V面	VII	37	21	16	15	27	
		ASP05	IV B-95	V面	VII	28	29	26	19	13	
		ASP06	IV B-95	V面	VII	32	27	16	14	16	
		ASP07	IV B-95	V面	VII	27	26	16	14	17	
		ASP08	IV A-94	V面	VII	25	21	18	15	17	
		ASP09	IV A-94	V面	VII	44	33	31	21	17	
		ASP10	IV A-94	V面	VII	51	45	32	27	25	
		ASP11	IV A-94	V面	VII	36	34	31	22	15	
		ASP12	IV A-94	V面	VII	21	24	26	15	27	
		ASP13	IV Y-94	V面	VII	37	26	26	15	27	
		ASP14	IV Y-94	V面	VII	49	41	40	34	15	
		ASP15	IV Y-95	V面	VII	49	28	37	15	27	
		ASP16	IV C-95	V面	VII	55	39	47	23	28	
		ASP17	IV C-95	V面	VII	31	24	20	14	15	
		ASP18	IV B-94	V面	VII	29	22	14	9	17	
		ASP19	IV B-94	V面	VII	30	25	21	14	18	
		ASP20	IV B-94	V面	VII	24	20	11	9	31	
		ASP21	IV B-94	V面	VII	32	42	26	19	43	
		ASP22	IV B-94	V面	VII	36	34	19	12	26	
19	ASP23	ASP23	IV Y-94	V面	VII	37	30	29	22	41	
		ASP24	IV Y-95	V面	VII	69	41	56	26	37	
		ASP25	IV Y-95	V面	VII	35	25	29	17	35	
		ASP26	IV Y-94	V面	VII	20	17	17	13	15	
		ASP27	IV Y-94	V面	VII	29	17	15	13	15	
		ASP28	IV Y-94	V面	VII	21	19	16	14	21	
		ASP29	IV Y-95	V面	VII	24	21	16	15	14	
		ASP30	IV Y-95	V面	VII	28	24	21	17	19	
		ASP31	IV Y-95	V面	VII	18	14	12	9	8	
		ASP32	IV Y-95	V面	VII	37	30	29	22	16	

柱穴(A区)

番号	造喰名	主位置	縦認面	底面 長軸	上端 長軸	下端 長軸	横さ (cm)	備考
ASP43	Ⅲ Y-85	Ⅷ	Ⅷ	26	24	19	16	33
ASP44	—	—	—	—	—	—	—	欠番
ASP45	Ⅲ X-65	Ⅷ	Ⅷ	25	22	19	13	30
ASP46	Ⅲ X-85	Ⅷ	Ⅷ	29	26	20	16	34
ASP47	Ⅲ X-65	Ⅷ	Ⅷ	40	32	25	22	38
ASP48	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	29	28	24	21	25
ASP49	Ⅲ X-85	Ⅷ	Ⅷ	25	22	14	13	29
ASP50	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	55	43	44	39	44
ASP51	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	68	51	29	22	45
ASP52	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	36	34	32	21	32
ASP53	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	61	30	29	15	41
ASP54	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	19	15	16	12	17
ASP55	Ⅲ X-85	Ⅷ	Ⅷ	30	22	14	11	51
ASP56	Ⅲ X-65	Ⅷ	Ⅷ	37	31	20	16	18
ASP57	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	(30)	(30)	15	11	57
ASP58	Ⅲ X-64	Ⅷ	Ⅷ	24	21	20	16	28
ASP59	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	33	26	20	18	35
ASP60	Ⅲ X-64	Ⅷ	Ⅷ	33	29	25	24	20
ASP61	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	53	35	33	16	43
ASP62	Ⅲ X-85	Ⅷ	Ⅷ	35	25	16	14	22
ASP63	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	29	23	19	15	33
ASP64	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	31	25	17	15	14
ASP65	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	25	23	15	11	31
ASP66	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	41	28	26	18	54
ASP67	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	69	40	29	19	43
ASP68	Ⅲ X-95	Ⅷ	Ⅷ	33	23	22	16	29
ASP69	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	27	25	17	16	14
ASP70	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	31	27	20	16	33
ASP71	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	38	31	26	25	41
ASP72	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	30	24	15	8	39

19

番号	造喰名	主位置	縦認面	底面 長軸	上端 長軸	下端 長軸	横さ (cm)	備考
ASP73	Ⅲ X-94	Ⅷ	Ⅷ	28	25	14	12	36
ASP74	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	33	28	21	17	20
ASP75	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	28	25	19	16	23
ASP76	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	C34	21	15	11	23
ASP77	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	26	24	17	15	29
ASP78	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	47	42	31	26	29
ASP79	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	49	40	12	19	42
ASP80	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	49	25	25	23	44
ASP81	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	48	26	39	23	21
ASP82	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	24	19	16	17	21
ASP83	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	45	27	29	21	29
ASP84	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	(43)	(31)	(30)	(28)	17
ASP85	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	(56)	(54)	(50)	(44)	17
ASP86	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	55	44	44	35	17
ASP87	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	66	54	53	47	16
ASP88	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	25	20	12	12	23
ASP89	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	28	25	19	19	19
ASP90	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	52	46	42	36	26
ASP91	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	48	39	40	31	16
ASP92	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	44	31	22	21	22
ASP93	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	29	21	16	16	21
ASP94	Ⅲ Y-94	Ⅷ	Ⅷ	49	41	42	34	14
ASP95	Ⅲ Y-93	Ⅷ	Ⅷ	37	32	23	17	22
ASP96	Ⅲ Y-93	Ⅷ	Ⅷ	32	31	25	23	22
ASP97	Ⅲ Y-93	Ⅷ	Ⅷ	30	19	15	10	42
ASP98	Ⅲ U-93	Ⅷ	Ⅷ	51	30	37	22	28
ASP99	Ⅲ U-93	Ⅷ	Ⅷ	79	49	44	26	69
ASP100	Ⅲ U-93	Ⅷ	Ⅷ	65	51	22	14	71
ASP101	Ⅲ Y-95	Ⅷ	Ⅷ	37	32	26	22	14

柱穴(B区)

番号	造喰名	主位置	縦認面	底面 長軸	上端 長軸	下端 長軸	横さ (cm)	備考
BSF01	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	49	37	18	16	26
BSF02	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	46	46	20	17	15
BSF03	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	30	28	19	13	7
BSF04	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	40	35	23	19	10
BSF05	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	28	24	16	14	9
BSF06	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	38	32	24	20	36
BSF07	Ⅲ Q-95	Ⅸ	Ⅸ	80	67	58	48	40
BSF08	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	45	45	35	33	37
BSF09	Ⅲ P-94	Ⅸ	Ⅸ	69	50	38	32	45
BSF10	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	58	48	24	17	18
BSF11	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	26	21	14	13	10
BSF12	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	53	46	39	29	36
BSF13	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	42	33	27	23	46
BSF14	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	66	54	43	36	44
BSF15	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	31	27	20	17	14
BSF16	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	53	46	34	35	52
BSF17	Ⅲ P-94	Ⅸ	Ⅸ	38	35	27	24	15
BSF18	Ⅲ P-94	Ⅸ	Ⅸ	43	35	24	26	31
BSF19	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	29	28	23	20	49
BSF20	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	46	37	26	21	42
BSF21	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	35	33	28	26	31
BSF22	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	58	56	44	33	33
BSF23	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	45	37	30	28	21
BSF24	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	50	43	33	30	38
BSF25	Ⅲ O-95	Ⅸ	Ⅸ	66	48	46	35	44
BSF26	Ⅲ O-95	Ⅸ	Ⅸ	42	36	27	19	39
BSF27	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	74	71	50	49	55
BSF28	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	45	36	37	26	21
BSF29	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	62	58	42	39	33
BSF30	Ⅲ O-95	Ⅸ	Ⅸ	42	36	27	22	28
BSF31	Ⅲ O-95	Ⅸ	Ⅸ	36	28	17	14	30
BSF32	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	43	36	24	17	27
BSF33	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	44	38	31	29	41
BSF34	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	32	30	27	24	39
BSF35	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	32	21	14	10	49
BSF36	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	56	51	37	31	39
BSF37	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	33	29	13	11	46
BSF38	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	46	36	33	22	47

19

番号	造喰名	主位置	縦認面	底面 長軸	上端 長軸	下端 長軸	横さ (cm)	備考
BSF29	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	24	21	19	15	37
BSF40	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	27	24	16	14	38
BSF41	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	27	21	22	17	45
BSF42	Ⅲ O-96	Ⅸ	Ⅸ	54	49	42	27	37
BSF43	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	56	28	28	15	17
BSF44	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	35	33	42	35	30
BSF45	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	27	24	21	12	38
BSF46	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	50	38	29	9	47
BSF47	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	36	30	18	18	37
BSF48	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	71	44	56	31	34
BSF49	Ⅲ N-96	Ⅸ	Ⅸ	39	29	25	19	38
BSF50	Ⅲ N-96	Ⅸ	Ⅸ	33	31	28	22	34
BSF51	Ⅲ M-95	Ⅸ	Ⅸ	36	23	21	16	28
BSF52	Ⅲ M-95	Ⅸ	Ⅸ	35	20	29	26	27
BSF53	Ⅲ M-95	Ⅸ	Ⅸ	30	30	26	22	18
BSF54	Ⅲ M-95	Ⅸ	Ⅸ	26	23	13	12	56
BSF55	Ⅲ M-96	Ⅸ	Ⅸ	30	24	21	18	21
BSF56	Ⅲ D-96	Ⅸ	Ⅸ	21	20	23	22	32
BSF57	Ⅲ N-96	Ⅸ	Ⅸ	26	22	22	18	5
BSF58	Ⅲ D-96	Ⅸ	Ⅸ	41	22	19	13	49
BSF59	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	21	29	22	29	39
BSF60	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	25	25	16	15	26
BSF61	Ⅲ N-96	Ⅸ	Ⅸ	60	46	64	36	33
BSF62	Ⅲ N-96	Ⅸ	Ⅸ	21	20	21	22	32
BSF63	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	58	57	44	42	20
BSF64	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	56	57	44	42	20
BSF65	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	29	25	22	18	15
BSF66	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	32	49	49	32	35
BSF67	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	87	45	62	25	44
BSF68	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	(103)	(76)	(60)	(58)	23
BSF69	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	80	73	63	58	32
BSF70	Ⅲ N-96	Ⅸ	Ⅸ	74	60	68	36	45
BSF71	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	36	23	17	17	60
BSF72	Ⅲ N-95	Ⅸ	Ⅸ	37	32	22	20	13
BSF73	Ⅲ O-95	Ⅸ	Ⅸ	49	40	26	22	31
BSF74	Ⅲ P-95	Ⅸ	Ⅸ	51	34	24	18	33
BSF75	Ⅲ Q-96	Ⅸ	Ⅸ	27	25	22	14	21
BSF76	Ⅲ P-96	Ⅸ	Ⅸ	36	35	14	12	31

柱穴 (C区)

図番	造喰名	主位置	神認番	底面 長軸	底面 短軸	上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	高さ (cm)	備考
CSP01	Ⅲ E-87	Ⅶ	Ⅷ	53	32	43	26	33			
CSP02	Ⅲ E-87	Ⅶ	Ⅷ	28	24	20	19	30			
CSP03	Ⅲ E-87	Ⅶ	Ⅷ	39	32	27	15	28			
CSP04	Ⅲ E-87	Ⅶ	Ⅷ	33	27	16	13	37			
CSP05	Ⅲ E-86	Ⅶ	Ⅷ	(37)	(34)	21	16	35			
CSP06	Ⅲ D-96	Ⅶ	Ⅷ	42	29	22	16	50			
CSP07	Ⅲ E-96	Ⅶ	Ⅷ	50	44	43	38	45	柱直径15×14cm		
CSP08	Ⅲ D-96	Ⅶ	Ⅷ	43	(31)	30	22	43	柱直径16×6cm		
CSP09	Ⅲ D-96	Ⅶ	Ⅷ	46	41	29	24	28			
CSP10	Ⅲ D-96	Ⅶ	Ⅷ	35	26	29	21	27			
CSP11	Ⅲ D-96	Ⅶ	Ⅷ	38	28	31	18	29			
CSP12	Ⅲ D-96	Ⅶ	Ⅷ	31	28	17	17	33			
CSP13	Ⅲ D-95	Ⅶ	Ⅷ	31	20	15	14	35			
CSP14	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	(43)	(20)	(20)	(18)	35			
CSP15	Ⅲ C-96	Ⅶ	Ⅷ	39	25	20	21	35			
CSP16	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	48	41	31	28	56			
CSP17	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	33	26	19	13	67			
CSP18	Ⅲ C-96	Ⅶ	Ⅷ	48	46	31	29	66	柱直径25×21cm		
CSP19	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	37	31	17	14	55			
CSP20	Ⅲ C-97	Ⅶ	Ⅷ	52	46	23	15	51			
CSP21	Ⅲ C-96	Ⅶ	Ⅷ	96	74	82	67	34			
CSP22	Ⅲ C-96	Ⅶ	Ⅷ	58	44	43	31	34			
CSP23	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	49	42	37	27	30			
CSP24	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	45	36	30	23	59			
CSP25	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	40	33	32	29	39			
CSP26	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	(43)	(42)	14	11	86			
CSP27	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	41	29	16	10	35			
CSP28	Ⅲ A-96	Ⅶ	Ⅷ	50	33	15	8	44			
CSP29	Ⅲ A-96	Ⅶ	Ⅷ	36	29	14	13	67			
CSP30	Ⅲ B-96	Ⅶ	Ⅷ	27	20	12	10	78			
CSP31	Ⅲ B-97	Ⅶ	Ⅷ	27	24	16	13	33			
CSP32	Ⅲ B-97	Ⅶ	Ⅷ	33	21	14	10	43			

柱穴 (F区)

図番	造喰名	主位置	神認番	底面 長軸	底面 短軸	上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	高さ (cm)	備考
FSP01	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
FSP02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
FSP03	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
FSP04	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
FSP05	Ⅱ E-86	Ⅸ	Ⅹ	25	23	14	12	9			
FSP06	Ⅱ E-96	Ⅸ	Ⅹ	28	25	18	11	14			
FSP07	Ⅱ E-96	Ⅸ	Ⅹ	27	24	18	14	15			
FSP08	Ⅱ D-96	Ⅸ	Ⅹ	31	30	13	12	24			
FSP09	Ⅱ D-96	Ⅸ	Ⅹ	28	24	15	12	23			
FSP10	Ⅱ E-96	Ⅸ	Ⅹ	31	30	19	18	24			
FSP11	Ⅱ E-96	Ⅸ	Ⅹ	33	32	20	16	30			

柱穴

図番	写真	出土点	出土層位 取土番号	種類	鉢種	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内縁外径 (mm)	内縁内径 (mm)	外縁厚 (mm)	文字面厚 (mm)	重量 (g)	外面調整 (文様)	時期
17-1	-	A3D1	1層	陶質	深打水波	23.15	18.46	8.04	6.24	1.10	0.92	2.6	筆書き、表裏面平滑	北宋・1101年初期
22-1	-	C区	1層	陶質	深打水波	24.13	19.90	8.70	6.97	1.18	1.09	3.1	筆書き、表裏面平滑	北宋・1068年初期
22-2	-	C区	1層	陶質	支文焼	19.25	16.43	9.47	7.53	0.79	0.45	1.0	筆書き、施錫銘	中唐宋～青瓷初期
22-3	-	H区	1層	陶質	深水波質	24.02	19.29	7.15	5.59	1.14	0.67	2.5	窓水波質1期(古窓水)・繁花 窓水波質3期(新窓水)・繁花 表裏面平滑	南宋13世紀(1300年後半)
22-4	-	C区	1層	陶質	深水波質	23.30	18.30	7.54	6.16	1.14	0.63	2.1	筆書き、表裏面平滑	元総10年(1297年)初期

陶器

図番	写真	出土点	出土層位 取土番号	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴等
-	22-1写真2	筆跡2	雨上	陶器	盆	-	-	(4.20)	外面：黄褐色、内面：黄褐色、胎上：明灰色

図番	造喰名	主位置	神認番	底面 長軸	底面 短軸	上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	高さ (cm)	備考
CSP33	Ⅲ B-87	Ⅷ	Ⅸ	23	22	12	9	41			
CSP34	Ⅲ B-87	Ⅷ	Ⅸ	61	49	27	25	67			
CSP35	Ⅲ C-87	Ⅷ	Ⅸ	34	32	30	26	26			
CSP36	Ⅲ H-96	Ⅷ	Ⅸ	(34)	(20)	13	10	56			
CSP37	Ⅲ G-96	Ⅷ	Ⅸ	(54)	(44)	(31)	(11)	34			
CSP38	Ⅲ G-96	Ⅷ	Ⅸ	27	17	16	12	16			
CSP39	Ⅲ F-96	Ⅷ	Ⅸ	(49)	(29)	14	6	35			
CSP40	Ⅲ E-96	Ⅷ	Ⅸ	(47)	(42)	(20)	(11)	21			
CSP41	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	(30)	(21)	(13)	(3)	35			
CSP42	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	(23)	(13)	(6)	(8)	20			
CSP43	Ⅲ G-96	Ⅷ	Ⅸ	62	61	27	23	28			
CSP44	Ⅲ F-97	Ⅷ	Ⅸ	(70)	(60)	48	26	24			
CSP45	Ⅲ H-96	Ⅷ	Ⅸ	23	29	14	12	59			
CSP46	Ⅲ H-96	Ⅷ	Ⅸ	26	20	13	11	15			
CSP47	Ⅲ E-96	Ⅷ	Ⅸ	47	43	23	17	48			
CSP48	Ⅲ G-97	Ⅷ	Ⅸ	36	29	22	13	36			
CSP49	Ⅲ E-96	Ⅷ	Ⅸ	27	25	19	12	35			
CSP50	Ⅲ E-87	Ⅷ	Ⅸ	29	24	29	18	28			
CSP51	Ⅲ E-96	Ⅷ	Ⅸ	31	30	25	21	32			
CSP52	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	(36)	(34)	(25)	(20)	26			
CSP53	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	43	36	24	21	27			
CSP54	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	25	29	20	17	30			
CSP55	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	25	29	20	17	30			
CSP56	Ⅲ C-96	Ⅷ	Ⅸ	(18)	(11)	(12)	(8)	38			
CSP57	Ⅲ C-96	Ⅷ	Ⅸ	21	20	23	18	19			
CSP58	Ⅲ B-96	Ⅷ	Ⅸ	53	43	25	21	28			
CSP59	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	25	28	14	13	25			
CSP60	Ⅲ D-96	Ⅷ	Ⅸ	(21)	(29)	17	14	28			
CSP61	Ⅲ F-96	Ⅷ	Ⅸ	36	29	24	19	21			
CSP62	Ⅲ C-96	Ⅷ	Ⅸ	(68)	(52)	(43)	(26)	36	柱直径25×15cm		
CSP63	Ⅲ C-87	Ⅷ	Ⅸ	(34)	(26)	13	11	38			
CSP64	Ⅲ D-97	Ⅷ	Ⅸ	46	27	24	17	23			

柱穴 (F区)

図番	造喰名	主位置	神認番	底面 長軸	底面 短軸	上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	高さ (cm)	備考
FSP12	Ⅱ E-86	Ⅸ	Ⅹ	25	28	14	13	25			
FSP13	Ⅱ D-86	V	Ⅹ	22	20	13	13	12			
FSP14	Ⅱ D-85	Ⅸ	Ⅹ	23	21	12	11	32			
FSP15	Ⅱ D-85	Ⅸ	Ⅹ	23	17	16	12	13			
FSP16	Ⅱ E-87	Ⅸ	Ⅹ	24	19	15	13	26			
FSP17	Ⅱ D-87	Ⅸ	Ⅹ	25	24	20	19	9			
FSP18	Ⅱ D-85	Ⅸ	Ⅹ	(30)	(16)	21	(9)	35			
FSP19	Ⅱ C-85	Ⅸ	Ⅹ	(42)	(35)	13	12	92			
FSP20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
FSP21	Ⅱ C-85	Ⅸ	Ⅹ	(37)	(29)	19	13	26			

第4章 自然科学分析

第1節 戸来館遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科

佐々木 実

1. 試料

分析を行った試料は、表1に示す6試料である。

2. 分析方法および分析結果

上記6試料の火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い、含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子の実体顕微鏡による観察、および紫外線硬化樹脂により封止したスミアスライドの偏光顕微鏡による観察を行った。火山ガラスおよび火山灰起源鉱物の有無を確認し、存在する場合はその形態、構成鉱物の種類を記載した。

分析結果を、表2に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を、図1に示す。

3. 火山灰の帰属

火山灰1、3～6は採取地点および層位より、白頭山一苦小牧テフラか十和田aテフラに帰属すると予想されている。火山灰2は層位的な関係から十和田bテフラと予想されている。

白頭山一苦小牧テフラ (B-Tm) は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山（長白山）の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含む（町田・新井 2003）。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている（Oppenheimer et al., 2017; Hakozaki et al., 2018）。

十和田aテフラは、十和田カルデラの平安時代の最新噴火によって生じた。軽石型およびバブル型の無色火山ガラスのほかに、褐色を呈する気泡の少ないガラス片を含む特徴がある。鉱物は斜長石、直方輝石（斜方輝石）、普通輝石を含む（町田・新井 2003）。本テフラの噴出年代は、從来AD915年とされてきたが（町田ほか 1981; 早川・小山 1998）、白頭山苦小牧テフラの年代がAD946年とされたことにより（Oppenheimer et al., 2017; Hakozaki et al., 2018）、今後再検討される可能性がある。

上記2テフラは、褐色ガラス、無色鉱物の種類（斜長石およびアルカリ長石）、有色鉱物の種類（普通輝石、直方輝石およびエジリンオージャイト）に着目することにより識別でき、各試料にどちらのテフラに由来する物質が含まれているかを推定できる。

表2に示すように、火山灰1、3～6のいずれの試料も十和田aテフラに帰属すると推定される。火山灰2については洗浄後の試料に火山ガラスはほとんど含まれないが、鉱物組み合わせからは十和田aテフラまたは十和田bテフラに由来すると考えられ、層位的な関係から十和田bテフラとしても矛盾はない。

引用文献

- Hakozaki, M., Miyake, F., Nakamura, T., Kimura, K., Masuda, K., & Okuno, M. (2018) Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774–775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*, **60**, 261–268.
- 早川由紀夫・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—. 火山, **43**, 403-407.
- Horiuchi, K., Sonoda, S., Matsuzaki, H. and Ohyama, M. (2007) Radiocarbon analysis of tree rings from a 15.5- calkyr BP pyroclastically buried forest: a pilot study. *Radiocarbon*, **49**, 1123-1132.
- 町田 洋・新井房夫(2003), 新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, **51**, 562-569.
- Oppenheimer, C., L. Wacker, J. Xu, J.D. Galván, M. Stoffel, S. Guillet, C. Corona, M. Sigl, N. Di Cosmo, I. Hajdas, B. Pan, R. Breuker, L. Schneider, J. Esper, J. Fei, J.O.S. Hammond, U. Büntgen (2017) Multi-proxy dating the 'Millennium eruption' of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*, **158**, 164-171.

表1 戸来館遺跡 火山灰サンプル

サンプル番号	試料記載	分析に使用した重量(g)	洗浄後重量(g)
火山灰1	III層	9.7	3.5
火山灰2	V層	10.5	5.1
火山灰3	III層	10.2	3.9
火山灰4	FSI-02	10.0	3.0
火山灰5	FSI-03 覆土	5.6	2.2
火山灰6	FSI-03 覆土	5.8	2.1

表2 戸来館遺跡 火山灰記載

サンプル番号	火山ガラス						鉱物					帰属
	bw	pm	br	pl	af	opx	aug	ag-aug	ho	opq	—	
火山灰1	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	—	To-a
火山灰2	—	+	—	○	—	○	○	—	—	—	○	To-a
火山灰3	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	—	To-a
火山灰4	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	—	To-a
火山灰5	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	—	To-a
火山灰6	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	—	To-a

○: 含まれる; +: 微量に含まれる; -: 含まれない

bw: バブル型ガラス, pm: 軽石型ガラス, br: 橙色ガラス, pl: 斜長石, af: アルカリ長石, opx: 直方輝石,

aug: 普通輝石, ag-aug: エジンオリージライト, ho: 普通角閃石, opq: 不透明鉱物

To-a: 十和田アテラ

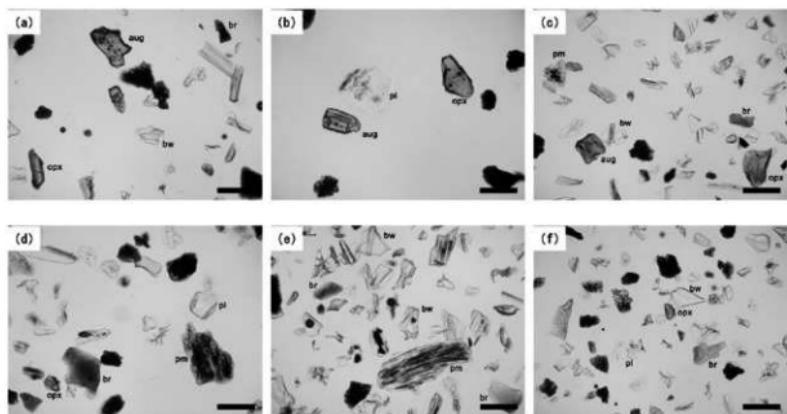


図1 火山灰試料の偏光顕微鏡写真

下方ポーラのみ（オープンニコル）。左下スケールの長さは 200 μm 。記号は表2に同じ。

(a) : 火山灰 1, (b) : 火山灰 2, (c) : 火山灰 3, (d) : 火山灰 4, (e) : 火山灰 5, (f) : 火山灰 6

第2節 戸来館遺跡より出土した炭化材の樹種

古代の森研究会

1.はじめに

戸来館遺跡は新郷村に所在し、縄文時代の土坑、平安時代の竪穴建物跡、中世の竪穴建物跡、堀跡などが確認されている。本遺跡の平安時代の竪穴建物跡では多数の炭化材が検出され焼失建物と考えられた。そこで当時の建物構築材における木材利用状況を把握する目的で7点の炭化材の樹種同定をおこなった。炭化材試料は自然乾燥後に横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割り取りプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本に基づき同定した。

2. 同定結果と考察

戸来館遺跡出土炭化材の樹種組成を表1に示した。本遺跡で確認されたのは3分類群であった。総数で最も多いのはニレ属4点で、コナラ亜属コナラ節2点、カツラ1点であった。最も多く確認されたニレ属は丘陵や溪流沿いなどに多く東北では2種が生育している。またカツラは溪流沿いに生育する落葉高木である。本遺跡周辺ではこれらの樹種がかなり多く生育する環境であったと思われ、東北で利用頻度が高いコナラ節よりもニレ属の利用が多くなったと考えられる。東北では建築材におけるクリの比率が高いが本遺跡ではクリが確認されずコナラ節も少ないという結果となった。

青森県内の平安時代の建築材とみられる炭化材の樹種ではクリとコナラ節が圧倒的に多い（伊東ほか2012）が、昨年度おこなった猪ノ鼻（1）遺跡における平安時代竪穴住居跡の炭化材分析ではコナラ節よりトネリコ属とハンノキ亜属の比率が多く、該当樹種は異なるもののブナ科木材より溪流沿いの樹種が多く利用されていたという点で本遺跡と類似している。

以下に同定した炭化材の構造的記載をおこなう。

コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Pinus*)：年輪最初に大きな道管が数個塊をなしてその後徐々に径を減じて火炎状ないし波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で通常2-3ミリ程度の間隔で横断面に広放射組織が現れる。道管の穿孔板は单一で放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

ニレ属 (*Ulmus*)：年輪はじめて大きい道管が1列並び小さい道管が斜線状に集合して連なる環孔材で道管は單穿孔があり、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射組織は同性で1~7細胞幅程度で比較的滑らかな紡錘形で放射柔細胞に時々結晶がみられる。

カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)：中程度のやや角ばった道管が単独ないし2-3個不規則に結合しほぼ径を変えずに年輪内に平等に分布する散孔材で道管の密度が高い。晚材部にはやや径が小さい道管がみられる。放射組織はほぼ2細胞幅の異性で、上下端は典型的な直立細胞で、間に方形細胞と平伏細胞がある。道管の穿孔板は階段状で段数が多い。

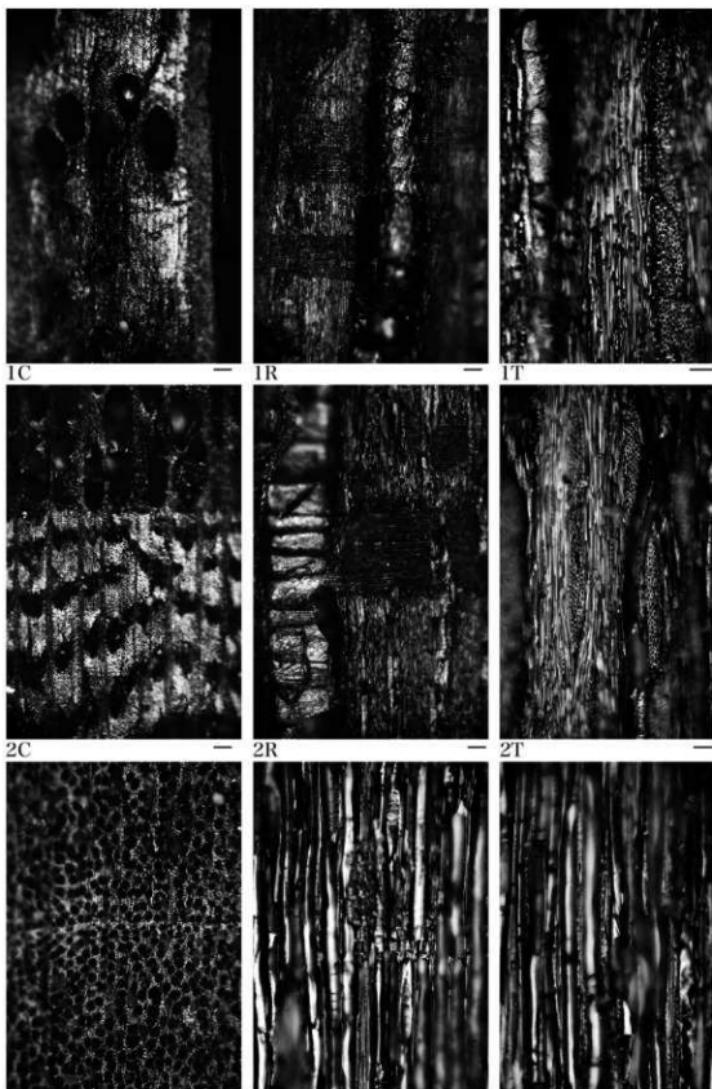
(吉川純子)

表1 戸来館遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	樹種
1	CSI-01	I層 炭化材	コナラ亜属コナラ節
2	FSI-01	炭化材1	コナラ亜属コナラ節
3	FSI-01	覆土	炭化材3 ニレ属
4	FSI-01	覆土	炭化材4 ニレ属
5	FSI-01	覆土	炭化材7 ニレ属
6	FSI-01	覆土	炭化材15 カツラ
7	FSI-01	覆土	炭化材19 ニレ属

引用文献

伊東隆夫・山田昌久, 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社.



1. コナラ節 (CSI-01 1層) 2. ニレ属 (FSI-1 炭化材 19) 3. カツラ (FSI-1 炭化材 15)
C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

図版1 戸来館遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

第5章 総括

第1節 戸来館遺跡の主な調査成果

戸来館遺跡は、十和田湖の東、新郷村中心部の金ヶ沢地区に所在し、村役場南西側に隣接する高台（標高145m前後）に位置する。一帯は緑豊かで静かな山間の地であり、館跡や戸来家にまつわる地名・家伝・逸話も知られるなど、これから歴史的発見が期待される土地柄でもある。

本遺跡の調査・報告は、平成30年度に実施した試掘調査（青森県教育委員会2019）に基づき、今回初めて実施された。村内では畠垣遺跡と獅子神遺跡に次ぐ3例目の本格的調査である。

調査区は、五戸川に向かって突出する台地の東側縁辺部に該当し、これをめぐって東西へ走る国道454号線に沿う形で設定された。安全対策上、急斜面・宅地前・電柱周辺などは未調査、搅乱・削平も多く、調査結果や解釈に何らかの影響を及ぼしている部分もあると思われる。

遺跡内の地形は、舌状台地の自然地形を基本としつつも、中世城館期から現代に至るまでの人工地形が入り交じる状況と推測される。調査区内は急斜面主体であり、台地上のわずかな平坦面には五戸川や役場を見下ろすように古民家などが軒を連ね、隣接地は宅地や畠地などに利用されている。

主な成果として、縄文時代早期中葉・同中期後葉・平安時代中期・中世以降の長期に亘る歴史的足跡が断続的に得られた（下記）。民地や急斜面などの制約が多いこともあり、いずれの時期も断片的内容となるが、今後、平坦部の調査が進むにつれ、様々な解明に近づいていくと予想される。

縄文時代：今のところ新郷村最古の歴史資料となる白浜式土器片1点のほか、中期後葉の集落跡の一部らしき土坑2基と土器・石器。

平安時代：十和田a火山灰（915年）降下以後の10世紀中葉以降に形成された集落跡の一部とみられる竪穴建物跡3棟（カマド南側・北東側各1、不明1）と土器・鉄製品。

中世：館跡南東側縁辺部の最上位～中位を調査。標高135～147m前後、五戸川との比高差20～30m程度。発見された主な遺構・遺物は、曲輪3ヶ所以上、帶曲輪（腰曲輪）4～5ヶ所、堀跡2条、溝跡3条、竪穴造構1～2棟、銭貨3点など。柱穴群の帰属時期は不明、施設復元も現状困難である。これらの遺構は『青森県の中世城館』にみえない2本の堀に区画された3つの曲輪と帶曲輪を中心とする館跡南東側の諸施設と考えられる。すなわち、堀跡1により分断された曲輪1と曲輪2、堀跡2により分断された曲輪2と曲輪3、そして曲輪1の下方に帶曲輪1、曲輪2の下方に帶曲輪2・3・4（3と4は同一か）、曲輪3の斜面下方に位置する帶曲輪5が主要施設となる。また、国道454号線一帯にも一定規模の曲輪が存在する模様である。この他、曲輪1の縁辺部に竪穴造構、帶曲輪1・4・5の基部に排水溝（溝跡）が存在する。館跡の外観は、曲輪・帶曲輪・堀跡の形態・標高が各々類似することから、形状や高さが揃えられ、整えられた普請だった様子が窺える。出土遺物は非常に少ないが、無文銭の存在を重視すれば、16世紀後半に機能していた城館と仮定される。

その他：近世～現代の柱穴群・陶磁器・銭貨など。地質調査では、遺跡・館跡にまつわる台地の形成が約15,000年前の十和田・八戸火碎流を起源とする土石流堆積物の膨大かつ地形を大きく変える堆積の後、二ノ倉スコリア（約11,600年前）、新郷軽石（約11,000年前）、南部軽石（約9,200年前）、中振軽石（約6,200年前）と続くことが判明した。

（調査担当者一同）

第2節 戸来館の歴史的評価

本節は、中世城館部分の発掘調査成果を地域史に位置づけることを目的とする。その手順として、新郷周辺の中世史と戸来氏の来歴および中世考古学の成果を概観した後、戸来館の評価へと移る。

1. 戸来館遺跡周辺の中世略史

本地域の歴史史料は、同時代史料から伝承までが混在している（第2章）。これらを極力区別しながら要点を述べると、当地方の起源は、平安時代末期における奥州藤原氏の統治下「糠部」（『吾妻鏡』）、ないし中世前期の寛元4年（1246）における得宗領「糠部五戸」（『北条時頼下文』常陸宇都宮文書）として鎌倉幕府の統治下におかれていた段階まで遡り得る。

戸来の初出は、永仁5年（1297）に五戸川流域の諸村とともに記された「へらいのかう」（『五戸郷検注進状』）であり、同じく新郷村西越地区の初出は、正安3年（1301）の「三戸さけこし」（『きぬ女申詞書案』）と目されている。ともに、鎌倉幕府の安定的統治の下、発展が進んでいたのであろう。先の寛元年間以降、五戸の地は代々三浦氏が治めていた模様だが、建武2年（1335）、三浦介平時継・高継父子の分裂を経た後、「陸奥糠部内五戸」は「父介入道々海跡本領事」（『足利尊氏宛行状』）として足利尊氏から子高継へと宛がわれている。

永正年間（1504～1521）、戸来の地は、糠部「五の部」の馬産地「やうい」として現れ、その馬印（焼印）は「雀」とされている（『糠部九箇部馬焼印図』古今要覽稿）。先の『きぬ女申詞書案』には、新郷一帯が馬産地だった片鱗はみえているが、南部氏の支配により更なる発展を遂げていたのであろう。

文化・信仰面について、戸来田中には、青森県南地方の修験で大きな役割を担った多聞院が在住、現存する多数の文書は大永5年（1525）を最古とし、16世紀以降充実する。寺社の創建年代が江戸時代以前と伝わるのは、五戸川流域では新郷村戸来の三嶽神社（貞觀5年（863））と曹洞宗長泉寺（明応5年（1496））、五戸町倉石又重の曹洞宗儒童寺（天正4年（1576））、同中市の曹洞宗源福寺（元亀3年（1572））、同上新井田の淨土宗専念寺（元亀元年（1570））、同銀杏木の曹洞宗高雲寺と八幡宮（ともに永正4年（1507））、同じく浅水川流域では五戸町浅水の曹洞宗宝福寺（大永3年（1523））と真言宗来福院（大永7年（1527））、五戸郷検注進状の「きたならさき」に比定される八戸市豊崎町の真言宗普賢院（承安元年（1171））や七崎神社（承和元年（834））が知られる。全般的に曹洞宗寺院が多く、戸来の寺社は当地域の中でも古社・古刹が目立つ傾向にあるといえよう。

その他の伝承については、明応5年、戸来館遺跡北東に隣接する長泉寺が同じ戸来の獅子神地区から現在の金ヶ沢地区へ移転してきたという。戸来氏の統治も文明年間（1469～1486）に始まり、慶長3年（1598）には戸来館主として800石を知行し、三戸南部氏譜代の臣として活躍したという。天正19年（1591）に起きた九戸の乱における五戸領主層の動向は、勝者となった南部信直方に木村一党的戸来氏（戸来館）・又重氏（又重城）・木村氏（五戸館）、敗者となった九戸政実方に中市氏（中市館）と石沢氏（石沢館）とに分かれたと伝わる。戸来館の東にある又重城には、政実自身の攻撃を撃退した逸話も残るほか、中市城は破却されたという（「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」）。

2. 戸来氏の来歴

江戸時代に編纂された家譜によると、戸来氏の本姓は秀郷流藤原氏、下野国小山氏の支流木村氏の嫡家とされる。戸来初代となる小山秀政が南部光行に従って糠部三戸に入り、同三代目祐秀の代に南

部実光から五戸木村郷を与えられた後、代々五戸を拠点としたが、戦国時代の文明年間に3家に分かれ、嫡流が戸来に定着、戸来氏を名乗ったとされる。この時、次男は五戸（木村家）、三男は又重（又重家）に配されたという。なお、『奥南旧指録』では、平安初期の貴族、紀名虎の子孫とされている。

今、これら家譜前半を裏付ける歴史的証拠は必ずしも定かではないが、戸来氏の足跡は戦国時代末期から江戸時代初期に活躍した保秀（治部）・秀純（美濃）の頃より明らかとなり始め、やがて戸来氏と木村一党は三戸南部氏そして盛岡藩重臣として南部一門に次ぐ待遇を受けるようになる。いずれも江戸時代の記録になるが、保秀・秀純父子は、小田原参陣（天正18年（1589））、九戸城攻撃（天正19年（1591））、最上表従軍（慶長5年（1600））、岩崎合戦（同年）、大阪冬の陣（慶長19年（1614））等に加わったとされ、その武功を讃えた逸話も幾つか知られる。慶長3年（1598）の状況を示すとされる『南部氏慶長支配帳』（館持支配帳）には、「五戸戸来館八百石三ツ巴戸来治部」と記されている。

次の江戸時代、五戸川流域は引き続き木村一党による支配が認められた。特に、木村氏が代々五戸代官務めたことは知られている。しかし、又重氏が先ず調落。戸来家も秀純の嫡子国秀の死（寛文11年（1671））を以って3家に分裂、各々平士へ格下げとなるが、その後も戸来3家による戸来村の分割統治は認められた。この頃、戸来金ヶ沢より上手の五戸川最上流域は、中世前期以降、開発が大きく進んでいた模様であり、現集落の基礎が固まりつつあった（延宝7年（1679）「百姓小高帳」）。戸来家不振の時期は暫く続いたが、幕末に十郎左衛門家の秀包（官左衛門）が家老に抜擢、約150年振りに重臣へ返り咲く。なお、現在戸来に居住する戸来氏は、六右衛門家秀持の末裔といわれている。

3. 戸来館周辺における中世の考古学的様相

五戸川および浅水川流域には、上記の歴史的状況を裏付けるかのように、中世とされる遺跡が点在する（第2章）。その種類・内訳は、城館跡を主体とし、埋蔵鉄出土地（戸来女ヶ崎）や社寺跡（戸来長泉寺跡）に及ぶ。しかし、具体的な状況がある程度判明しているのは、五戸町によって整備が進められた中市館と五戸館に過ぎない。ともに15～16世紀代の所産とされ、遺構は掘立柱建物跡や堅穴建物跡、遺物は各種陶磁器・茶臼・鉄製品・古銭・鍛冶道具などが断片的に発見されている。その他、城館は未調査につき、中世か否かの判別も含め、曖昧な部分が多い。これから解明が期待される。

なお、女ヶ崎出土埋蔵鉄は、16世紀後半とされている。青森県南地方では数少ない埋蔵鉄出土地であるとともに、先の五戸川最上流域の開発とも関連付けることが可能な貴重な存在である。また、長泉寺跡（新郷村史跡）には、丘陵斜面を削平・平坦化したと思われる場所に礎石らしき扁平な石が点在する。今は近世の社寺跡として遺跡登録されているが、寺伝に信を置くと明応4年以前に遡る可能性があり、こちらも注目すべき存在である。

4. 戸来館の認識および研究史

これより先は戸来館そのものに対する記載が中心となるが、その前に、戸来館の具体的位置や構造を示す中・近世の絵図や文書等の記録類が今日まで未発見であることを先ず確認しておきたい。

ところで、戸来館の「跡」について触れた文献は、2つ知られる。一つは沼館愛三氏の『南部諸城の研究』、もう一つは、昭和58年（1983）に当教育委員会が刊行した『青森県の中世城館』である。

先ず沼館氏は、戸来館を五戸川河谷の平城^{※1}と捉え、位置・立地・城主・戦略的価値・由来、そして戸来氏の来歴を記した（下記）。位置は、五戸の西南12kmとしている。これは五戸館跡（現歴史みらいパーク）から戸来館遺跡の距離約13kmとほぼ一致するため、沼館氏は本遺跡を戸来館跡と見做していたと思われる。

戸来館 五戸の西南十二軒戸郡戸来村にあり五戸川の上流右岸に位置する。当館の由来は明らかでないが戸来氏の居館である。戸来氏は又重の木村氏と同族で、奥南旧指録には五戸の又重、戸来の二家は木村氏にて紀名虎の子孫であると記している。館持支配帳には、「五戸戸来館八百石戸来治部」とある。其後戸来氏の動静は明かではないが南部八戸藩主戸来氏があり、其後裔と称している。戸来館は丘陵の末端が台地となり五戸河谷に臨んだ丘を利用した平城である。三戸城西北辺防備の要点ではあるが、又重よりも西偏しているので又重に比し価値が著しく減少する。

(『南部諸城の研究』p.87-88)

次に『青森県の中世城館』では、位置・地名・略図が明示され、所在地は戸来館遺跡一帯とされた。しかし、沼館氏とは異なり、館主・沿革は不明としている(下記)。

戸来館 新郷村 新郷村の旧役場跡付近を通称館とよび(館神集落)、空堀が残存する。五戸川の北岸台地上に位置し、館跡の南を県道が通っているが、この県道は一部堀跡を通過している。堀合坂と呼ぶところもある。このあたりには馬場の地名があり、この館に関連する場所の一部と思われる。館主・沿革等不明。

(『青森県の中世城館』p.191)



両見解は、館主の言及に違いがあるものの、戸来館遺跡一帯を中世戸来館と捉えている点は一致している。詳しい経緯は不明だが、昭和のある時期に行われた本遺跡の登録も、両見解に基づいて行われたとみなされる。しかし、中・近世における戸来館の認識が不充分である今、本遺跡と中世戸来館が同一と言い切れるか若干疑問が残る。なぜなら、戸来地区には沢口館、長峰館、倉沢出口館も存在するからである^{※2}。戸来館遺跡は、あくまで推戸来館というべき存在といえる。

とはいっても、本遺跡一帯が中世戸来館だった可能性は高い。矛盾するようだが、念のためこの点に触れておくと、今日、本遺跡を城館とみなす地元の認識は相当薄くなっているが、本遺跡一帯にまつわる江戸から明治時代前期の史料には、館・館神・馬場などの地名が継続的に表れており、堀合坂に代表されるように、本地區を城館と見做す地元の承認は今日まで続いている。これに対し、先に掲げた戸来地区の他の城館および集落では、同様の承認を見出しづらい。要は、戸来地区で城館という認識が明確かつ代々続いている場所は、戸来館遺跡を含む館神地区周辺のみといえる。

更に戸来館遺跡周辺には、上述のとおり、五戸川流域でも古くから存在する信仰施設などが集中する特徴がある。このうち、戸来家が中興し、その菩提寺ともなった長泉寺には、今なお殿様の墓(寛文11年(1671))が現存し、何名かの当主が埋葬されたと伝わる。また、館神地区には、今も戸来家とその家臣の流れを汲む家が在住し、幕末の盛岡藩家老戸来秀包の来訪と在地家臣との交流の話、殿様である戸来家の位牌を祀る家まで存在するなど、戸来家と特に密接に関係する地となっている。

このように、本遺跡周辺における古地名の在り方、中世を起源とする信仰施設の配置状況、戸来家にまつわる菩提寺や伝説の在り方などを総合すると、江戸時代頃より館跡や文化信仰の中心地として歴史的に認められてきたのは戸来館遺跡一帯を除いて他に無く、よって中世後半にまで遡り得る戸来の中心地だったと目される訳である。そして、その核となったであろう戸来館の跡こそ、今回の調査で発見された城館跡である可能性が最も高いと考えられるのである。

5. 戸来館跡にまつわる聞き取り

それでは今、戸来館遺跡を城館跡とみなす認識はいかほどであろうか。遺跡周辺の居住者や出身者に簡単な聞き取りを行ったので、参考までに示す。対象人数は5~10名程度、対象年齢は60~80代。結論からすると、全般的に城館という認識が低い反面、堀合坂が城の堀という話は聞いたことがある

という矛盾するような回答が大半だった。その中でも、遺跡内に居住する80代半ばの男性2名から館跡にまつわる明瞭かつ具体的な証言が得られた。本稿は、概ね両者の話をまとめたものとなる。

さて、下記①～③は発掘調査区内に係る事項であるが、城館の施設という意識は聞かれなかった。一方、④～⑥は発掘調査区外に係る事項であり、堀および帶曲輪（腰曲輪）、馬場などが城館の一部として認識されている様子も窺われた。ちなみに、両者以下の年齢になると、代々居住している高齢者ですら知らない傾向にある。この点も鑑み、調査中、戸来小学校の生徒などを対象に現地説明会を実施、戸来館遺跡および戸来館、村内主要遺跡について理解を深めてもらう機会を設けた（写真左）。

- ① 堀跡1 地域の通路だった時期があり、戸来小学校などへ通じる脇道であった。30～40年ほど前から使われなくなった。堀底に下水管（塩化ビニール製）を埋設したり、ぬかるみ防止のため砂礫を敷き詰めたりした（筆者注：下水管・砂礫とも調査中に確認）。
- ② 堀跡2 国道と個人宅とを上り下りする通路として調査直前まで使っていた。
- ③ 帯曲輪1 部分的に改変され、堀合坂東側入口と堀1を結ぶ通路の一部だった時期がある。
- ④ 堀合坂 城の堀と聞いている（写真右、旧地籍図）。
- ⑤ 戸来館遺跡西側一帯 堀跡（筆者注：帯曲輪か）と聞いている（同絵図⑥・⑩）。
- ⑥ 馬場地区 城の一部だったと聞かされたような記憶があるが定かではない。場所は籠神地区の南西、国道454号線一帯だろう（筆者注：明治時代初期は支村）。



戸来小学校児童ほか現地説明会



堀合坂・籠神社・金ヶ沢（東から）

6. 戸来館一帯の旧地籍図およびその検討

こうした証言や発掘調査結果をより深く理解するため、今よりも中世に近く、土地の改変が進んでいない明治20年（1887）の地籍図（新郷村役場所蔵）を用いて本遺跡一帯の土地区画・利用を示し、城館復元の参考とする。あわせて発掘調査や聞き取り調査成果との相違についても言及する。

- ① 堀合坂に該当（現存）。東から西へ延び、国道454号線の完成以前、本地域の主要道だった。現在は長泉寺山門前の国道から西へ直進し、戸来小学校へ通じる坂道となっている。
- ② 堀合坂から堀跡1へ通じる小道。聞き取り①と③の証言に符合する在り方である。
- ③ 堀跡2の名残とみられる地境。しかし、絵図中には堀らしき表現は認められない。
- ④ 堀跡2の延長線上に位置する坂道（現存）。西の低地へ下る。これも堀の名残と思われ、③とともに台地および曲輪を南北に分割していたと推定される。
- ⑤ 台地中央を南北に延びる小道（現存）。この中央小道を軸に台地上の各地境は東西へ延びるた

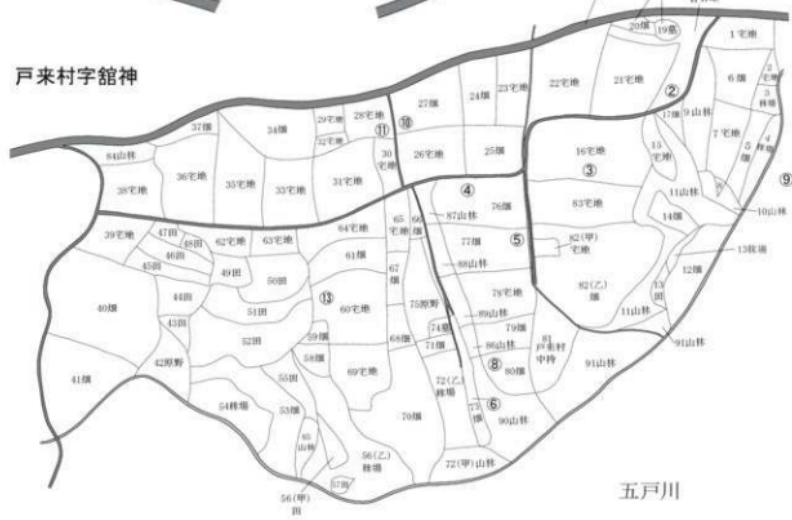
め、各地番は長方形ないし短冊形を呈する。現在、各地番の高低差は少なく概ね平坦だが、微地形を観察すれば、ところにより1m前後の高低差がある。特に、76~78番地周辺が若干高く、主殿等の中心施設の存在も予測される。なお、中央小道に沿う水路は今、山から引いた上水となっている。

- ⑥ 带曲輪の名残か（66・73番地）。聞き取り調査⑤に該当。南北に細長く延びる。上部斜面は南北に四分割されている（86~89番地）。現在、带曲輪の大半は削平され、急崖地の法面、宅地、国道の一部などと化し、極一部が残っているに過ぎない模様である。
- ⑦ 带曲輪の名残か（19・20番地）。現在も段差が明瞭である。
- ⑧ 台地先端の畠（80番地）。昭和25年（1950）年に戸来村役場が落成、現在は建設されたばかりの館神コミュニティーセンターが存在。西端には小祠が鎮座する。由来は不詳だが、小字である館神の由来、城館の精神的守りとなった館神の名残だろうか。南端部は、本調査F区に該当。
- ⑨ 館跡南東一帯（1~18番地、90・91番地）。宅地・山林・田畠・林場が混在する。うち山林は、現況との対比により、大部分が急崖や傾斜地と推定（9・10・11・18・90・91番地）。同じく田畠（12・13番地）と林場（3・4番地）は、国道454号線より下位の五戸川周辺一帯の低地と推定。斜面中腹には、宅地（15番地）や畠（14・17番地）がみえ、平坦地が部分的に存在した模様だが、以上が鉢型気味となる点は大変重要である。斜面上方の宅地境（16・83番地境）からは堀跡2も延びてきており、大手側の要所になろう。なお、この下位に位置する堀合坂入口付近は、宅地（1・7番地）や畠（5・6番地）につき、平坦気味だったとみられる。こちらも城館主体部へ上る手前の曲輪や要所か。発掘調査区外につき不明だが、本付近一帯も城館の要所と捉えておきたい。
- ⑩ 堀跡ないし帶曲輪か。『青森県の中世城館』中では堀跡として描かれている。現状は、東の堀合坂から続く舗装路であり、27番地と28番地の境を北から南へ下る坂道である。堀状に開削・工事されたとも、元は今よりもやや高い位置、すなわち26番地と27番地（曲輪の一部か）の平坦面からやや下った斜面中腹において段を成していたともというが不明。もし後者ならば、带曲輪の可能性も指摘される。なお、曲輪頂部の平場から一段下がった位置に在る帶曲輪は、発掘調査で発見された帶曲輪1~5にみられるほか、上記⑥・⑦においても指摘したところである。
- ⑪ 館跡北西の要地か（28・30・31番地周辺）。高低差が著しく、舌状台地西側の基部に該当する。28・29・30・32・34番地は上位段丘、31・33・35番地以降は下位段丘に位置。五戸川方向から続く館跡西側の急傾斜地は、31番地北東角で西へ屈曲、33番地方向へと延び、舌状台地の基部を成す。なお、28番地は土地が南北に低い部分がある。東の堀合坂から続く堀切が眠っているかも知れず、ここから30ないし31番地方向へと下り、台地基部を分断していたようにも思える。
- ⑫ 曲輪の一つか。頂部に蘿神社が鎮座（⑫a）。頂部平坦地はわずかだが、周辺一帯で最も標高が高く、眺望が利く。北東には金ヶ沢が流れ、明らかな高低差を示す（⑫b）。第二次世界大戦以降、沢の埋め立てが進み、特に西側一帯が畠地と化したというが、昔は幅が広く、より深かつたそうである。
- ⑬ 馬場地区か。但し、証言は不明瞭。館跡南西側の下位段丘面、60~70番地一帯とみられ、現在同様、宅地や畠などの平坦地が広がっていた模様である。

戸来村字大久保



戸来村字館神



本図は、新郷村役場所蔵の旧地籍図2枚（上図は字大久保、下図は字館神）をトレース・改変したものである。現在の地図にあわせ、概ねの方角と縮尺を調整した。数字は番地を示す。

上下の図を東西に延びる長く太い道は同じ道で、その東側は通称廻合坂と呼ばれる(⑪)。よって、この道で上下の図を合成することは不可能ではないが、更に厳密な調整を要するため今回は別々に提示した。

戸来館遺跡周辺の旧地籍（明治20年）

7. 中世戸来館の復元および近世屋敷への存続・展望（抄）

地選・地取 五戸木村嫡家戸来氏の居城と伝わる戸来館は、五戸川と支流三川目川の合流点の西側、小平野と小平坦地が広がる場所に位置する平城である。館付近の交通・往来は、概ね五戸川沿いに東西へ移動していたと思われるが、五戸川へ突き出た難所に位置する戸来館は、これを遮るように築かれており、水陸移動の要所に位置しているようにもみえる。城地一帯の地形は、五戸川に向かつて南北に長い。標高は北が高く、南が低い。東・南・西側は急傾斜地であり、五戸川が天然の濠となる。北は、金ヶ沢が水濠代わりとなった可能性もあるが、概ね尾根続き気味となる。この点は防衛上の弱点となり得るが、堀切などの普請により補われる。他の城館などとの位置関係は、五戸川の東は同族木村氏の五戸館や又重氏の又重城、同じく西は霊峰三ツ嶽や峻険な十和田・鹿角の山々により守られる。丘陵が広がる南北は、北に奥入瀬川（相坂川）流域の諸城、南に西越館・聖寿寺館・三戸城など、三戸南部一族と譜代の臣が支配したと伝わる拠点が散在する。周辺主要城館までの距離は、又重城3.5km、五戸館12.5km、滝沢館5km、西越館3.5km、聖寿寺館10km、三戸城12km。

戸来館の選地で重視されたのは、第一に天險・要害性と考えられるが、五戸川最上流域の中継地、東西移動の要所確保、周辺城館や寺社勢力との関係性、中世前期「へらいのかう」以来の開発度合も考慮されたことだろう。三戸南部氏が比較的安定的に支配した三戸・五戸における最西端の防衛線上に位置し、その南北を結ぶ繋の城にもなり得る。なお、城地一帯は、いわゆる四神相応の地に類する。

範囲・縄張り 五戸川に向かい南へ突出した舌状台地全体が城館の主要範囲・縄張りとなる。これは『青森県の中世城館』で示された堀合坂（旧地籍図①）以南を主曲輪群と捉える見方である。曲輪の平場でみた城地の規模は、南北180～200m、東西130～140m、面積19,000m²（1.9ha）程度。他にも、堀合坂の北側一帯、龍神社から西へ延びる範囲を曲輪と捉える見方も挙げられる。この場合、すぐ北側の金ヶ沢が外堀代わりとなるが（旧地籍図⑫）、南を並走する堀合坂との間を南北に区切る何らかの区画が必要となり、その発見が課題となろう。ともかく、龍神社は標高が高く、眺望が利く。物見や射撃に有利である。金ヶ沢も水濠代わりとなる。地名からすれば、南西側の馬場地区（地籍図⑬）、これと同様の高さに位置する東側の国道454号線沿いも何らかの曲輪と推定する。更に、有事の際、北東鬼門方向に隣接する長泉寺も防禦の一角に組み込める仕組みだったようにも思われ、やや西に位置する三嶽神社や多門院にも、同様に神仏の威や加護が期待されたかも知れない。

構造・普請 主要施設は、台地最上位から中位に築かれたと想定。主曲輪は南北3つ以上並列、堀切は南北にかけて最低3ヶ所存在する。各曲輪は、平場の高低差が少なく、人工的に高さを揃えた削平地であろう。帶曲輪は、曲輪斜面の上位～中位にかけて雑壇状に重層的に設けられたと推定。今回の調査では、帶曲輪平場同土の高さに加え、堀の形状や高さも揃えられていることが判明した。外観が意識的に整えられた城館東側は、大手の候補地となろう。比較的整然とした城の姿は、曲輪内の屋敷割などにも及んでいた可能性もあり、南北に平行して設けられた各堀は東西軸の基準となり得る。一方、南北軸の基準は、堀に直交しながら曲輪中央付近を南北に結ぶ幅3mほどの小道とみられ、その東西には堀に平行する短冊状の地割が形成される。この小道と地割は、明治時代中期には明確に表れ、今も変わらぬ姿を保っているが、これが中世の名残であれば非常に興味深い。中心建物は、現在の母屋同様、南向きが主となろう。浪岡城北館のように、東西南北が明瞭かつ整然とした屋敷割が復元される可能性もある。曲輪の最南端には小祠も存在するが、これも中世の館神の名残ならば、興味深い（旧地籍図⑧）。城としての防御力は、地形と堀切より、五戸川に面した断崖を擁する南端部（F区）が高く、尾根続き気味の北側ほど低いと見込まれる。主曲輪や主殿の位置は、どちらかとい

えは南寄りの微高地と推定され（旧地籍図⑤）、北側ほど外曲輪、南側ほど内曲輪となろう。

その他の特徴を列举すると、各曲輪斜面の傾斜角は40～45°程度（参考値）。曲輪1は、南東端が東へ突出気味につき、曲輪2方向に対して横矢が利く。曲輪縁辺に竪穴造構を設ける点は、他の諸城と同様である。曲輪2は、東縁の南北長23m。この部分の間積りは、1人1間とすれば十数名配置可能となる。帯曲輪は、概ね幅3m以上と推定、基部の溝は排水なし下水溝か。帯曲輪2は他よりも一段高く、重層射撃に有利である。堀は、底部に階段状の平坦面と空間を形成。その役割は不明だが、高さ2～3mほどの段差が設けられ、三方から見下ろされることを重視すれば、障子堀や行留郭のように攻撃側を足止めし包囲殲滅させる目的のほか、守備側が自軍の兵を待機させる武者溜や武者隠としての利用も想起させる。場内へ進入する動線は、城戸・虎口等の存在が不明につき課題だが、東から入る場合、重層射撃や横矢効果を考えると曲輪2周辺、更に奥の曲輪3が有力視される。

年代・廃絶 存続期間は、目下不明。築城開始は、戸来家入部と伝わる文明年間に遡る可能性を秘めるが、無文銭の存在を重視すると16世紀後半に機能していた可能性が高まる。破却時、堀は鍔や鍔などの金属器を用いて帯曲輪平場の高さまで一気に埋め戻されたとみられるが、曲輪の平場縁辺付近は堀の痕跡が残された公算が大である。そこには、防御の要となる堀や帯曲輪の機能を大幅に低下させる意図とともに、破壊を徹底しない意図も垣間見える。八戸根城同様、防衛上重要な施設の破壊を第一としたか。埋土の出所は、その質より、周辺の曲輪や堀の壁面が掘り崩されたといえるが、この時、周辺施設が混乱され、遺構・遺物の遺存状況に何らかの影響を与えた可能性もある。この点は、他の城館の廃絶・調査・復元を考える上でも留意すべき事項となろう。

最後に、戸来館の廃絶時期に敢えて触れると、やはり天正18年（1590）の奥州仕置ないし翌19年の再仕置に係る破却が一つ有力視される。豊臣秀吉が南部信直へ発給した朱印状（天正18年7月）には、「一、家中之者共相拘諸城 悉令破却 則妻子三戸江引寄 可召置事」とあり、秀吉に忠実だった信直譜代の戸来氏が自城の破却に従った可能性が充分にある。但し、翌19年に起きた九戸政実の又重城攻撃が事実ならば、戸来館にも何らかの備えが施されていたかも知れない。慶長3年（1598）に至ってもなお当館が存在していた可能性もあるが（『南部氏慶長支配帳』（江戸期））、江戸時代を通じて戸来氏がこの地を治め続けている事を加味すると、天正末年以降も戸来氏の統治拠点（屋敷など）が中世とは異なる姿で本遺跡内に構えられていたとしても不思議ではない。これは、八戸根城や七戸城の破却に類する見方である。戸来館の堀の埋め立てが徹底されていない理由をこの辺に一つ見出すとすれば、秀吉による破却命令の遵守と、その後も続く戸来氏統治における必要性との均衡を図った結果の表れといえまい。あわせて、中世戸来館の軍事性喪失から近世戸来屋敷を中心とする地方支配への転換、ひいては中世の終焉と近世への移行の一端を示しているという指摘にも繋がる。

なお、本遺跡の調査・報告は、まだ続く予定である。不備等は今後改定に努めたい。 （佐藤）

※1 城地の地形利用区分表中において、河岸に臨みたる台地若しくは山稜の尾根の末端を利用せるもの（山地内の小河谷を含む）に分類（沼田1981 p. 3～6）。

※2 隣接する沢口館と長峰館は同一の遺跡か。ともに土師器・須恵器が散布するため、平安時代の区画集落から中世城館への再利用も想定される。倉沢出口館は、平面形状からすると平安時代の区画施設または中世でも城館以外の施設にみえる。以上の性格について、平安時代の区画集落、戸来館以前の城館、戸来館西方の守りに関わる一城館の可能性を挙げておく。

引用・参考文献

- 青森県 2003 『青森県史』 資料編 考古 4 化研究室紀要』58
 中世・近世 倉石村 1983 『倉石村史』上巻
- 青森県 2004 『青森県史』 資料編 中世 I 倉石村 1989 『倉石村史』下巻
 南部氏関係資料 栗村知弘 1989 「天正期の根城 一破却（城わ
 り）の実態についてー」『研究紀要』5
- 青森県 2012 『青森県史』 資料編 中世 3 北奥関係資料 八戸市博物館
- 青森県 2016 『青森県史』 資料編 中世 4 金石文・編さん物・海外資料・補遺 五戸町教育委員会 1996 『五戸館遺跡』
 五戸町教育委員会 2005 『中市館跡V・馬場遺
- 青森県 2016 『青森県史』 資料編 近世 4 南部 I 盛岡藩領 跡 II・八戸久保（2）遺跡・門前平遺
 跡』
- 青森県 2018 『青森県史』 通史編 原始 古代 中世 三戸町 1997 『三戸町史』上巻
 七戸町 1985 『七戸町史』第2巻
- 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』 千田嘉博ほか 1993 『城館調査ハンドブック』
- 青森県教育委員会 1985 『奥州街道（1）』 青森県「歴史の道」調査報告書 新郷村 1989 『新郷村史』
- 青森県教育委員会 1991 『中野平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第134集 鈴木克彦 1984 「青森県新郷村女ヶ崎から出土した古銭」『考古風土記』9
- 青森県教育委員会 2003 『獅子神遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第339集 田中喜多美 1979 私家版『戸来家七百七十年史』補遺
- 青森県教育委員会 2019 『青森県遺跡詳細分布調査報告書31』 青森県埋蔵文化財調査虎尾俊哉編 1982 『青森県の地名』日本歴史地名大系2 平凡社
- 青森県立図書館 1973 『木村文書』解題書目第4集 南部叢書刊行會 1928 『南部叢書』第二冊
- 井上宗和 1978 『日本の城の基礎知識』 南部叢書刊行會 1929 『南部叢書』第五冊
- 小山彦逸 2013 『北奥羽地方における一国一城令破却後の城跡利用の一断面』『研究紀要』18 青森県埋蔵文化財調査センター 沼館愛三 1981 『南部諸城の研究』
- 亀ヶ岡文化研究会 1979 『新郷村喫煙遺跡の調査』 亀ヶ岡文化研究会調査研究報告1 古市豊司 1980 「『書評』新郷村喫煙遺跡の調査」『考古風土記』5
- 菊池徹夫ほか 1989 『よみがえる中世4』北の中世 津軽・北海道 平凡社刊 1959 「先縄文・縄文時代」『世界考古学大系』1 日本1
- 岸俊武編 1876 『新撰陸奥国誌』5 みちのく 双書第19集 青森県文化財保護協会 三浦栄一 1982~2019 『流れる五戸川』
- 熊谷隆次 2015 『文禄・慶長初期における南部領五戸新田村代官所について』『東北文



曲輪2 堀跡1（北から）



曲輪3 堀跡2（北東から）

写真1 調査前状況（1）



曲輪2 曲輪3 (南東から)

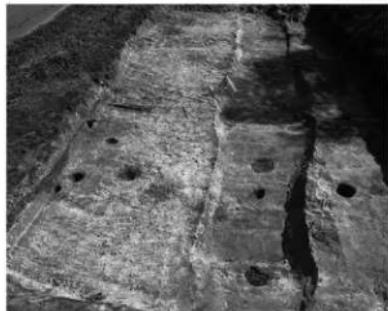


曲輪1 曲輪2 堀跡1 (東から)

写真2 曲輪 (1)



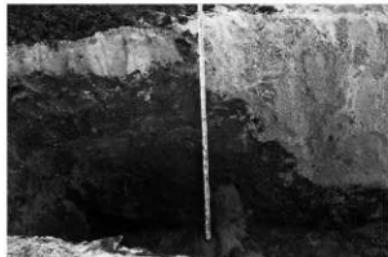
C区・D区調査状況（北西から）



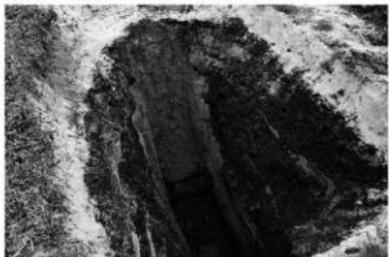
C区下調査状況（北から）



C区下調査状況（南から）

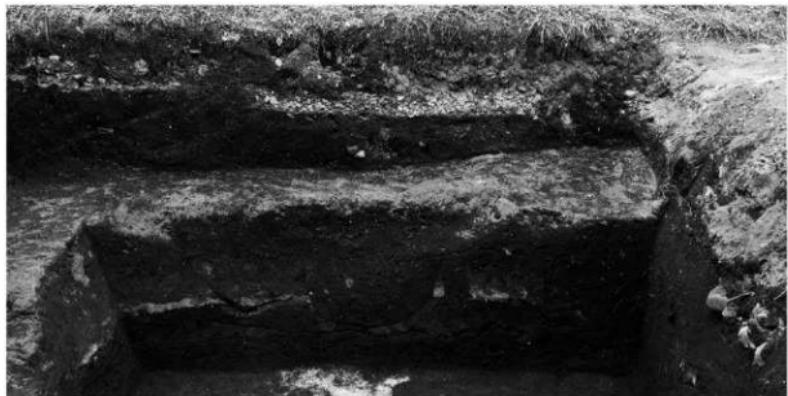


E区南側調査状況（北から）



E区北側調査状況（東から）

写真3 C区・D区・C区下・E区調査状況



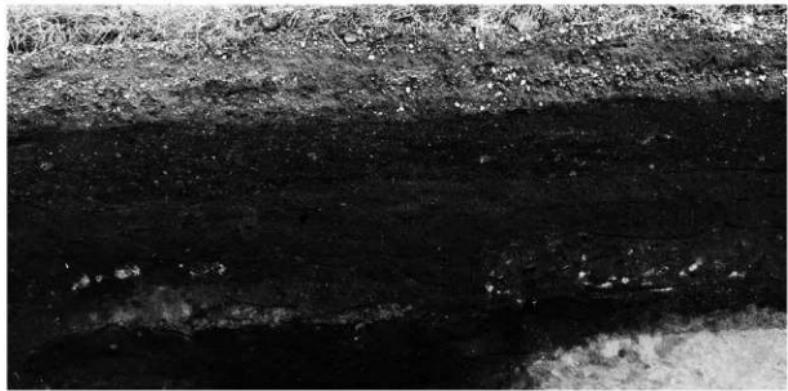
F区第一次精査範囲南壁土層堆積状況（北から）



F区第一次精査範囲北壁土層堆積状況（南から）



F区第一次精査範囲西壁土層堆積状況（東から）



F区東壁基本土層（西から）

写真4 基本土層（1）



F区 西壁基本土層（南東から）



F区第VII層以下土層断面（東から）



FSK02・03 完掘・土層堆積状況（北西から）



FSK02・03 完掘・土層堆積状況（南西から）

写真5 基本土層（2）・縄文時代の遺構



CS101 遺物・炭化物出土状況（東から）

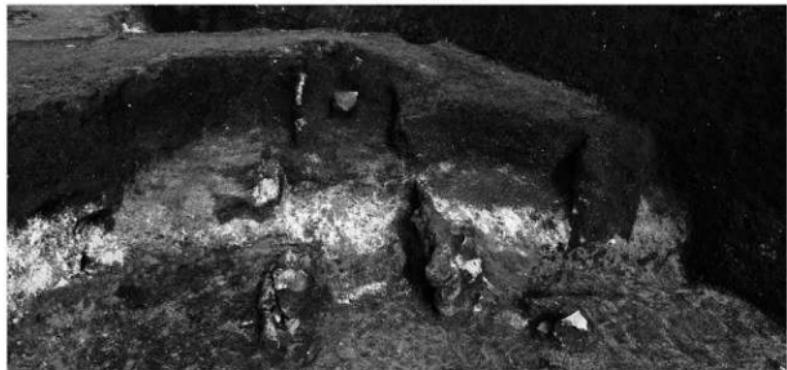


CS101 土層断面（東から）

写真6 平安時代の竪穴建物跡（1）



FSI01 第二次精査範囲炭化材出土状況（北から）



FSI01 カマド 土器出土状況（南西から）



FSI01 カマド 土層堆積状況（南東から）

写真7 平安時代の竪穴建物跡（2）



FSI01 カマド 完掘状況（南西から）



FSI01 カマド 土器出土状況（南西から）



FSI01 カマド 火床面断面（南西から）

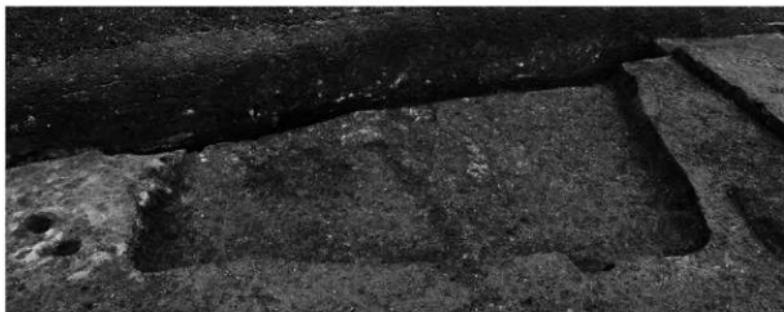


FSI01 完掘状況（南西から）

写真8 平安時代の竪穴建物跡（3）



FSI01 第一次精査範囲完掘状況（南西から）



FSI03 完掘状況（北から）



FSI03 柱穴検出状況（北東から）

写真9 平安時代の竪穴建物跡（4）



曲輪1 堀跡1 挖削前（南から）



曲輪1（北から）

写真10 曲輪（1）



曲輪2 带曲輪5（南から）

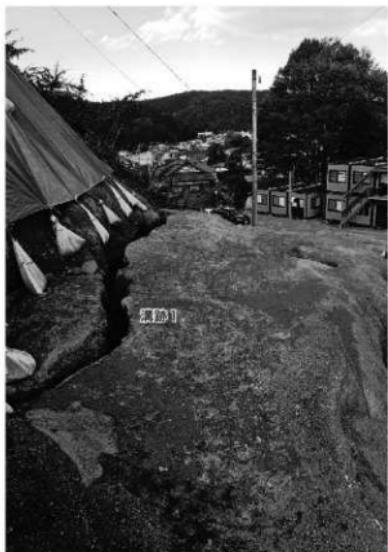


曲輪3北側 带曲輪5 堀跡2（東上空から）

写真11 曲輪（2）



帶曲輪1 金ヶ沢遠景（南西から）



帶曲輪1 近景（西から）



帶曲輪2（北から）

写真12 帯曲輪



調査前の崖み（東から）



参考 国道 454 号線下への堆積土延伸状況（西から）



d 地点 土層断面 A - A' (東から)



全景（東から）

写真13 堀跡1 (1)



曲輪1 帯曲輪1直下の壁面掘込み（東から）



帯曲輪1直下の壁面掘込み（東から）



c 地点底面（北から）

写真14 堀跡1（2）



全景（東から）



全景（西から）

写真15 堀跡2（1）



土層断面 A - A' (東から)



土層断面 A - A' (東から)



土層断面 C - C' (東から)



「地点底面 (北から)

写真16 堀跡2 (2)



堀跡2（C区下）全景（北東から）



堀跡2（C区下）底面（南から）



堀跡2（C区下）底面・南壁（北から）

写真17 堀跡2（3）

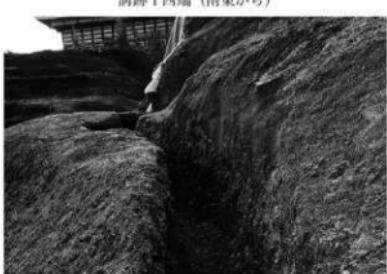
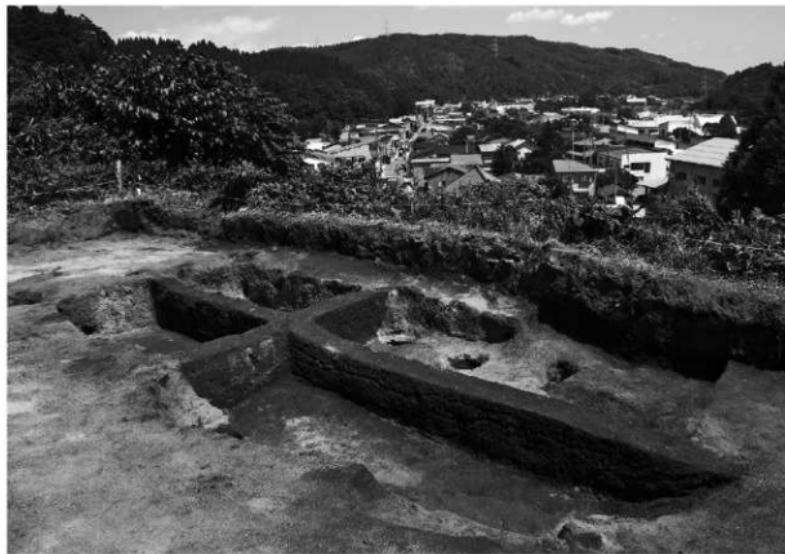


写真18 溝跡



AST01 完掘（南西から）



AST01 土層断面（南西から）

写真19 竪穴遺構（1）



AST02 完掘（西から）



AST02 完掘（北から）

写真20 竪穴遺構（2）



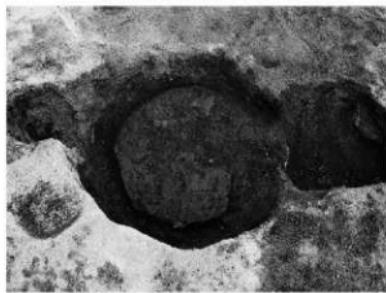
FST01 完掘状況 南西から



SP21 木質検出状況（南西から）



SP21 白色物質検出状況（南西から）



SP21 木質検出状況（南西から）

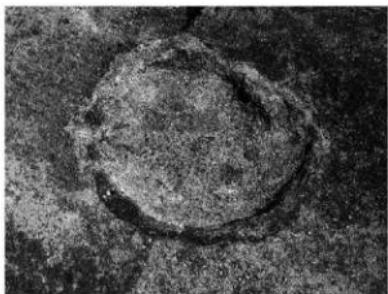


SP21 下半土層断面（南西から）

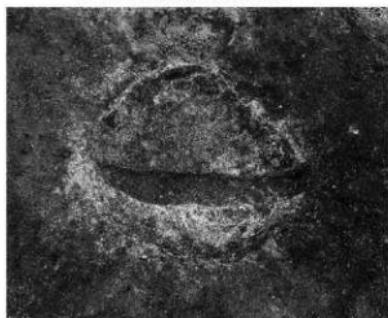
写真21 積穴遺構（3）・柱穴（1）



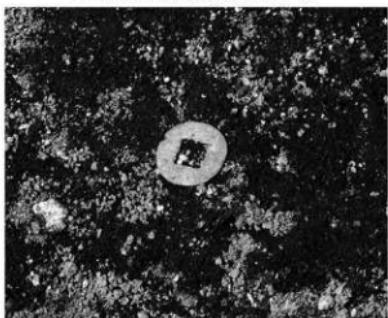
SP43 白色物質検出状況（南西から）



SP43 白色物質検出状況（南西から）



SP43 下半土層断面（南西から）



無文銭出土状況（南東から）



F 区 SP 完掘状況 北西から（2）



F 区 SP 検出状況 西から

写真22 柱穴（2）・C区錢貨出土状況

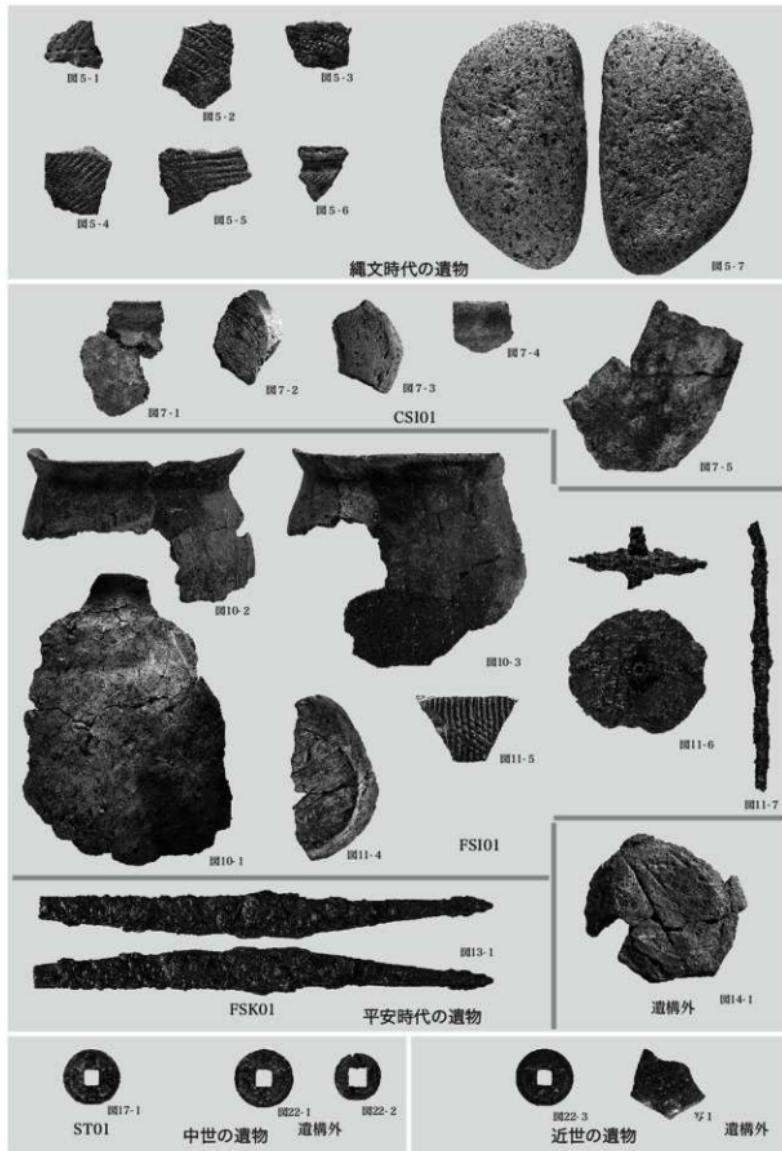


写真23 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へらいだていせき							
書名	戸来館遺跡							
刷書名	国道454号特定交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第618集							
編著者名	佐藤智生 中村哲也 平山明寿							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL.017-788-5701 FAX.017-788-5702							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2021年3月10日							
所収遺跡名	所在地	コード		世界測地系(JGD2011)		調査期間	調査面積(nf)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
戸来館遺跡	青森県 三戸郡新郷村 大字戸来地内	02450	450015	40°27'57"	141°10'20"	20190709 ~ 20191031	2,400	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
戸来館遺跡	散布地	縄文時代早期			白浜式土器	早期中葉の土器片。 中期末葉の土坑。		
	集落跡	縄文時代中期後葉		土坑	2			
	集落跡	平安時代		堅穴建物跡	3	土師器 須恵器 鉄器	中期頃の集落跡。	
	館跡	中世		曲輪 帶曲輪 堀跡 溝跡 堅穴遺構	3 5 2 3 2	銭貨	戸来館東端の遺構群。	
	集落跡	近世以降		柱穴群	250	陶磁器等	近世以降の集落跡。	
	集落または館跡	時期不詳		堅穴遺構	1			
	要約	戸来館遺跡は、青森県南東部の十和田湖に隣接する新郷村の役場西側一帯の河岸段丘上に位置する。遺跡は、戦国大名南部家家臣の戸来氏が治めた戸来館とされ、役場と五戸川を見下ろす標高135～145m前後の高台一帯に位置する。現況は、宅地や畠である。今回の調査は、本遺跡初の発掘調査であり、遺跡東側の斜面を主な対象として実施した。その結果、縄文時代は集落跡の一部の可能性がある土坑、平安時代は集落跡、中世は戸来館の東側に該当する曲輪や堀など、近世以降は集落跡に関わる柱穴等が発見されたが、調査区の位置・地形・擾乱・削平の関係上、各成果は断片的かつ本来の在り方が失われている部分も目立つ。						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第618集

戸来館遺跡

一国道454号特定交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告一

発行年月日 令和3年3月10日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 株式会社東奥アドシステム

〒030-0862 青森市古川一丁目21の12

セントラルビューあおもり2階

TEL 017-776-3771 FAX 017-776-3775